
犯罪者は英雄？

天川 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯罪者は英雄？

【Nコード】

N4280X

【作者名】

天川 流

【あらすじ】

かつて英雄なんて呼ばれた俺、華瀬悠希はなせ ゆうきは犯罪者となってしまうた。俺は何もしていない。かつての友人の助けによって俺は学園都市まで逃げ延び、なんと転入までさせてくれた。これは英雄から犯罪者まで成り下がってしまった一人の少年の物語。

prologue (前書き)

みなさん初めまして。天川流です。
まったくの素人ですすみません。

何かと不具合があるかと思っています。下手だと思しますので、ご指導
ご鞭撻お願いいたします。

prologue

「ハアハア・・・」

夜の街の人混みを押しのけながら俺は走り続ける。

「おいっ！早く探し出せっ！！絶対に逃がすなよっ！！」

街の喧騒の中に埋もれた男の怒声、ぶつかった女性の悲鳴、文句を叫ぶ若者の声。それらから逃げるように俺は走り続ける。

何故こんなことになった？

何度目かの疑問が俺の思考をよぎる。が、そんなことは分かり切っている。

嵌められたのだ。

では誰に？

そんなの俺が知りたい。

思いながらも足は止めない。止めようものなら首を落とされてあの世行きだろう。こんなところで死ぬわけにはいかない。

『そこを右に曲がって！』

頭に女性の声が響く。いつもは落ち着いた声音なのだが今は焦りが滲み出ている。その声に従ってビルの中を右に曲がる。その先に微かに見えるユラユラ揺らめく光の柱を確認して内心で安堵する。

「一葉っ！！あれか！？」

『聞いてる暇があるなら足を動かさない!!』

そう言いながらも彼女の声が先ほどよりも少しばかりホッとして
いるように思えるのは気のせいではあるまい。ならば――。

「あれがゲートっ!!」

走る速度が自然と速まる。

『セキュリティにかからないようにしたからそのまま正面から入
って』

「いいのかよ!? 問題になるぞ!？」

『いいわよ。理事長だもの』

「思いつきり職権乱用じゃねーか!!」

つついっつつコミを入れてしまった。けどまあ後で礼言わねーと
な。

「――っ!!!!」

思考に余裕が出てきたとき、背中に多数の殺気を感じた。本能に
従って真横に飛ぶ。

ドブウワァー!!

俺が居た場所に突如火柱が上がる。

あ、あぶねー。あのままだったら丸焦げ……。いや、あれぐ
らいなら大丈夫か。

「しっつっつこいんだよ!!!!!!」

叫び、敵の姿を確認しようともせず光の柱へと突っ走る。

(あと200・・・150・・・)

心の中で呟きながら走る。その間も敵の攻撃は止まない。それを全て交わしながら目測で数える。

(100・・・50・・・)

「おいっ！！誰か止めろっ

！！」

もうゲートがはつきりと見える位置まで近づき、後ろから焦りの声が聞こえてくる。

(30・・・15・・・5っ！！！)

五メートルを切った時点で俺は地面を蹴って飛び込む。

「転移っ！学園都市スフィアっ！！」

叫ぶと俺の体は白い光に包まれる。怒声や罵倒が後ろから聞こえてくるが、もう手出しできないはずだ。

今度こそ安堵のため息を吐く。光の量は徐々に増していき、俺はその場から消えた。

episode 1 堕ちた英雄

魔術師、死霊術師、召還術師、精霊術師、超能力者。

能力者と呼ばれる彼らが世界を発展へ導き、これらは世間の常識となっていた。

能力者は生まれながらにして一般人とは違う時間軸で生きている、そんなことを思っている者も少なくないだろう。

そんな彼らの“力”は当然軍事力としても使われる。

前世紀の兵器は能力者の軍隊には遠く及ばない。それ程に協力な物であり、国家が彼らを優遇するのは必然であった。

だが、彼らも人間だ。悪意を持って力を使わないとは限らない。

それは国際会議でも危ぶまれたことだ。

能力者をきちんと育成し、危険な思想を抱かせないようにする。

それがこの世界の課題となった。

そんなときに発案されたのが人口島“学園都市スフィア”の建設である。

各国が予算を出し合い、能力者を同じ場所で教育し、国が干渉できない場所。

すぐに国際会議で決定され、人口島の建設が進められた。なんと太平洋のど真ん中に。

飛行機で行かなければならないような場所であるが、それらを簡略化させる装置も当然作られた。

ゲート——正式名称『時空間転移魔法装置』。国の干渉ができないようにするため学園都市が許可した者のみをワープさせる夢アイ

テム。

各国が膨大な資金を投資したこれらは、ある人物の活躍により発案から僅か八年で完成された。

小、中、高、大学までの生徒数は約40万人。縦横およそ200キロメートルと広大な面積であり、もう一つの国と言っても過言ではない。

俺はそんな学園都市へとゲートにより一瞬で到着した。

「よつと」

ワープしてきた俺は初めの一步を踏み出す。

眼前にはヨーロッパや、日本風などの様々な建築物が広がっていた。初めてきた学園都市としては「綺麗なところ」といった感想だ。
「・・・疲れた」

そこで自分が先程まで走り回っていたことに気づいた。今更になって汗が滴り、呼吸が乱れる。

深呼吸。

肺の隅々まで酸素を行き渡らせるように何度も息を吸っては吐いていく。

「はぁー・・・しっかしなんというか・・・」

子供ばっかだな。

そう言おうとしたが、自分も16なので口にはしない。

だがそう思うのも当然で、見渡す限り少年少女しか見当たらない。さすがに店とかには大人もいるらしいが、7時半の帰宅ラッシュのこの時間に子供だけってのはなんだか変な感じだな。

トゥルルル。

そんなことを思っていると、ポケットの中に突っ込んでいた携帯が鳴る。通話ボタンを押して耳にあてる。

「・・・もしもし」

『もしもし？悠希？』

電話越しに俺を呼ぶ落ち着いた声。

「一葉か。わざわざケータイにかけずに念話でよかったのに」

『私はあんたより魔力無いから疲れるのよ』

首を竦めた気配が伝わってくる。念話とは、互いの思考を魔力で飛ばして会話する魔法だ。先程一葉の声が頭に響いてきたのはこの魔法のためである。

「まあいいや。で、俺はどこに行けばいい？」

『そうね、そこから一番高いビルが見えない？』

言われて辺りを見回す。すると一葉の言った通り一際大きい建物が目についた。

「ああ、見える」

『その最上階に来て。警備には私から言っとくから』

「ん、了解」

電話を切り、再びポケットに突っ込んでビルに向かって歩き出した。

ビルにたどり着くと警備員に声をかけられたがすんなり通してくれた。

エレベーターに乗り込み16階、最上階のボタンを押す。微かな浮遊感に包まれ、上昇していく。最上階へ到着し、真っ直ぐに伸び

る廊下をスタスタ歩く。

すぐに奥の扉の前に辿り着く。軽く深呼吸してドアをノックすると「どうぞ」と促されノブを回す。

「久し振りね悠希。それとも英雄、はなせ ゆっき華瀬悠希様のほうがいいかしら？」

「黙れ腹黒女。その英雄つてのやめろ」

ニコニコ軽口を言ってくる腹黒女ことなみかぜ かずは波風一葉。

俺より10歳は年上のはずなのだが、どうみても2つ上にしか見えない容姿は俺の暴言にも眉一つ動かさずに笑顔を振りまく。

「あらあら、せっかく困つてるところを助けてあげたのに」

「それに関しては素直に感謝してる。でもそれだけはやめろ」

軽く睨むと一葉は大袈裟に肩をすくめる長い黒髪がサラサラとなびく。普通ならばこの仕草だけでもバカな男が惚れるのではないかと思わせるほどのものだ。

「まああんたには五年前に紅葉を助けて貰ったから別にいいんだけどね」

「気にしなくていいのにな」

今度は俺が肩を竦める。

「まあその話はまた今度にしましょう。じゃあ本題に入るけど・・・」

「そこで言葉を区切る。続けられた問いは半ば予想していたものだった。」

「・・・何があつたの？」

こちらを窺うように上目遣いに聞いてくる一葉に俺は目を瞑った。数十秒の沈黙の後、口を開く。

「・・・俺がロシアからの大使たち14名を暗殺したんだと」

苦笑しながら言うと、ポカンとしてフリーズ。俺が言葉を理解したのか顔面蒼白になりながらおずおず聞いてくる。

「そ、それって何かの間違いでしょ？なんで悠希がそんなこと・・・」

」

最後ぐらいから消え入りそうな声になり、表情が沈んでいくのが目に見えてわかった。

「もちろん俺はなにもしてないけど、大方俺がまだ五年前のことを恨んでるでも思ってるんだろ。それか日本が俺を危険だと判断して殺そうとしたとか」

「・・・・・・・・・・」

自嘲気味に言う。と再びの沈黙。実際こればかりは言い返せないだろう。確かに俺は今でもあいつらを許せないし、何度も発狂しそうにもなった。そのたびに身を切るほどの憎悪を耐えて今まですごしてきたのだ。だがそんなこと言っても信じて貰えないのはわかりきっていることだ。

（さて、これからどこに行こうか）

幸いここにはゲートがある。これを使えば他国にも一瞬でつく。もちろん向こうのゲートに大人数で張り込まれていたらアウトだが、多少の包囲ならどうにでもなる。

これからの予定を立て終えたとき、沈黙を守っていた一葉の口が開かれた。その言葉はここに来る前にある程度予想していて、ここにきて忘れていたものだった。

「・・・じゃあしばらくここで過ごしなさい。もとよりそのつもりで呼んだんだし。それまでに私があんたの無実を証明してあげる。

絶対にあんたを殺させやしない」

「ちよつ、それは・・・」

迷惑かかるし。

そう言おうとしたが手で制された。一葉ならばそう言うと思っていたのだが、ここにきた安堵でそのへんを考えていなかった。彼女の顔を注意して見ると僅かに憤怒に顔を歪めている。だがそういうわけにもいかない。

「・・・そこまで迷惑をかけられない。それに俺は指名手配になる

だろうし、そんなことすれば一葉だけじゃなくて紅葉にも迷惑がかかる。第一あんたはこの理事長だ。責任取らされてやめさせられたらどうするんだ？」

「指名手配になんてならないわよ」

「・・・は？」

あまりにも平然と言つてのける彼女の言葉を俺は一瞬理解することができなかった。

「何言つて——」

「あんたは仮にもこの国で英雄なんて呼ばれてたんだから公表したらえらいことになるでしょ」

「・・・あー」

なるほど。

すごく不本意であるがそれならば納得できる。確かに俺が犯罪なんてしたつて言ったら全世界パニックものだろう。俺の名前は五年前の出来事で知れわたつてしまっている。

「だけどさ・・・」

逃げ道が見つからず口ごもってしまう。否定の材料が見つからない。そんな俺の態度を見て一葉は優しいげな声音で囁きかける。

「あんたは今まで一人でなんでもかんでも背負ってきたんだから、たまには他人を頼りなさい。確かに私はあんたに恩がある。けどだから助けるんじゃないの。困ったときはお互い様よ」

いつもの穏やかな笑みを浮かべる彼女に、俺は俯きながら「ありがとう」と呟いた。それが彼女に伝わったかはわからない。向かい合つてそんなことを言うなんてなんだか照れ臭い。

顔を上げて俺も心からの笑みで答える。もう心は決まった。

「じゃあ世話になることにする。もし面倒ごとになりそうになったら捨ててくれていいからな」

「そんなことしたらあの子たち殺されちゃうわよ」

一葉の冗談で笑い合い、この話はこれで終わりとなった。

今思えばこの決断で俺の人生が180度変わったんだろう。もしあのまま逃げ続けても禄なことにはならないのは目に見えているのだから運命ってのは皮肉なものだ。

episode 2
なんで疑問系？

血溜まりの市街地を俺は血の滴る剣を握って歩いていく。

まだ足りない。

俺の中で何かが囁きかける。

足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない。ない。

禄に考えられなくなった頭の中で、俺は求め続ける。

あいつらを殺せ。

兄さんを殺したあいつらを殺せ。

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い。憎い憎い憎い。

既に頭の中は既にそれだけしか考えられない。体は勝手に殺すべく敵を求め続ける。

ひたすら歩き続けると視界に軍服を着た20名程の男たちが映つた。

向こうも俺に気づいたようで10人程がこちらに向かってくる。

手にはそれぞれ武器が握られている。

——復讐だ。

駆け出し、剣を構える。一瞬で距離を詰め、一番前の低空姿勢で走ってきた男を斬り伏せる。血飛沫が上がり、顔に赤黒い液体が纏わりつく。だがそんなものは俺の意識にすら入らない。

そんな俺の姿を見て、周りの男たちの顔が恐怖で歪む。今はその表情を見るたびに心地よい達成感が全身を包む。

もつとこいつらに絶望を。

手近に居たやつの腕を斬り飛ばす。苦痛の悲鳴を上げる男を放置して他の奴らに斬りかかる。

腕。胴。足。首。

気付けば辺り一面にバラバラの死体と血の海が広がっていた。

もつとだ。

もつと殺さないと。

「・・・またか」

意識が覚醒していく。薄暗い部屋の中呟く。今日の夢も最悪だな、などと苦笑しながら内心で呟く。気付けば背中がじつとりと濡れていた。

ここ五年間、良くさつきと同じ夢を見ることがある。

嫌な夢だ。

忘れてしまいたい記憶。でもうまく忘れられないらしい。現に今でもまだ鮮明に覚えている。

そんなモヤモヤした気持ちに浸っていると、いつもと違う違和感を覚えた。視線を動かすとどうやら俺が寝ていたのは見慣れない部屋のソファアだったらしい。

「・・・あー」

するとすぐに昨夜の事を思い出した。

あの後一葉と入学についての説明を受けたあと、まだ正式に転入していないから寮の部屋を使わせることはできない、ということと都市庁（一葉が昨日呼び出したでかい建物のことだそうだ）の15階、つまり昨日行った理事長室のすぐ下の宿直室で一夜過ごすことになったのだ。本当に彼女には頭が上がらなくなるな。

ソファアから起き上がり、バスルームへ向かう。この宿直室にはバスルームやトイレまで完備されているらしい。

服を脱ぎ捨て、蛇口を捻る。勢いよく冷水が出てきたが、構わず体にかける。徐々に温度が上がっていき、丁度良いお湯になったところで体を洗う。

数分間浴びると蛇口を閉じる。バスタオルで体を拭き、先程まで着ていた服を着ろうとするが止めた。そういえば昨日はこの部屋に

たどり着くとそのまま泥のように寝た。当然服は着替えてなかったので汚いし、所々破れたり焦げたりしている。

昨日の帰りに一葉に新しい着替えと制服を貰っていたので問題無いのだが、なんだか捨てるのも勿体無いなあ、などと思う自分も居る。

数分悩み続けて結局捨てることに結論づけ、制服に着替える。

まだ登校するには二時間程早く、どうするか再び思考する。

コンコン。

うんうん唸っていると澄んだノックの音が聞こえてきた。

「は——」

はい、と答える前に扉が開けられた。こんなふうに入ってくる人物を俺は一人しか知らない。

「おっは・・あれ？なんで起きてるの？」

「寝てたらどうすんだよ・・・」

入ってきたのはやっぱり一葉だった。溜め息を吐きながらの抗議もこれも予想通りスルーされた。

「まあいいや。さ、行くわよ」

「行くってどこに？」

いきなり言われても理解が追いつかない。

「どこって、学校？」

「なんで疑問系？」

的確にツツコミを入れていく俺。うん、絶好調だな。

「ほら、あたし一応理事長だから。今日高校に用事あったし、ついでにと思って」

ニコニコしながら俺の手を引っ張る一葉に、「わかったから引っ張るな」とついて行く俺だった。

登校中はまだ時間も早いということもあり、あまり注目されずすんだ。

そんな中一葉が「学校大きいよー。顎外れちゃうかも」などと言やニやしながら言うてくる一葉に「まさか」と真っ向から否定。そんなはず——。

「……………でかつ」

……………あつた。

横で腹を抱えて笑う一葉など気にも止めず、俺は“それ”呆然と見続ける。

学校が見えない。正確には校舎が見えない。目の前に広がるのはバカでかい校門と柵ばかり。一体どれだけ金使ってるのか、などと考えるのも馬鹿らしくなるほどの広大さだった。

「……………帰っていい？」

「だーめ」

逃げ出そうとする俺の腕をがっしりホールドする一葉。傍から見ると腕を組んでいるように見えるのだが、そんなこと意識する余裕なんてない。

校門をくぐり、五分程歩くとようやく校舎が見えてきた。

「森の中の城みたいだな……」

もう驚くのも馬鹿らしくなってきた。城と呼ぶに相応しい校舎の広さに、初代理事長、各国首相に脱帽。

中に入るとやっぱり生徒は疎らだが、俺と一葉を見るとギョツと目を見開く姿に苦笑いを浮かべるしかない。

一葉は理事長だ。この都市のトップが俺みたいな一般生徒と一緒に歩いていると必然的に目立つ。

今が登校時間じゃなくてよかった、などと場違いな安堵をしていると突然一葉が足を止めた。訝しく思っただ足を止めた部屋を見る。

校長室。

そう書かれた部屋の前で彼女は深呼吸をしだした。

たかが高校の校長室に入るだけで何を緊張してるのだろうか？

一葉の方がよっぽど権力強いだろうに。

そんな俺の疑問を察したのか彼女は振り返り、小声で囁きかけてくる。

「ここの校長、ほんとムカつくの。何か嫌なこと言われるかも知れないから気をつけてね」

「げっ。まじで」

そんな奴が校長なんてしてて大丈夫なのだろうか？などと呑気なことを考えていた俺は、この後その嫌な校長に対面することを覚悟して一葉のノックを聞いた。

episode 3 愚親賢子

コンコン。

「どうぞ」

中から男の声が響いてきて、入るように促される。

「失礼します」

「失礼しまーす」

一葉はキチンと、俺は間延びした常套句を告げて扉をくぐった。

中は思ったより広いのだが、殺風景という言葉が似合う程物が置かれていない。あるのはソファアーが3つ、その間に長方形のテーブルが一つ、システムデスクが一つといったところだ。

そんな部屋に一人だけ、システムデスクの机にもたれてこちらを見ている人物がいた。

40代後半ぐらいだろうか。金髪の長髪を後ろで束ね、常に不機嫌そうな仏頂面を顔に貼り付けた男。

こいつか。

一目見ただけであまりいい印象を受けないこの男は、こちらの心情などお構いなしに口を開いた。

「・・・はじめまして、だな。ここの校長のマルク・ハイリルだ。お前がこの高校に転入してくるなんていう馬鹿者か。どんなコネを使ったかしらんが、試験もすっ飛ばして転入とはいいい度胸だな」

「はあ？」

綺麗な発音の日本語とは裏腹に明らかな敵意を含ませた発言。さすがにこれには力チンときた。こちらを伺う一葉とアイコンタクトを開始。

（このおっさん殴っていいか？）

（だめ。ここに入学できなくなるし、下手すれば追放されるわよ？）

（くっ！止めないでくれ一葉！男にはやらねばならぬときがあるんだ！）

（セリフはかつこいいけど動機が不純です、三点）

（せんせー、満点がどれくらいかわかりませーん）

そんな茶番劇をなんと1秒の間に済ませて、なんとか平静を取り戻した俺は満点の笑顔を浮かべてマルク校長に向かい直す。引き吊つてるなんて言われなくてもわかつてる。

「じゃあ、どうしたら転入させてくれるんですかー？おっさんの気分になんて付き合ってられませんよー？」

うん。多少悪態吐くのも仕方ないだろう。ム力つくもん。それぐらい勘弁してほしい。

だが向こうは俺の言葉で眉間に皺を寄せて俺を睨んでくる。おー恐い。

「ずいぶん生意気なクソガキだな。よかろう、転入試験をさせてやる。感謝して平伏せ」

「さすがおっさん。やっぱバカは扱いやすいつすね」

がはははは、と笑う俺と校長。視線と視線が交わって火花が散ったような気がするのだが錯覚か？

そんな俺と校長をハラハラしながら挙動不審に見守る一葉。もうパニクっているのだろう。口をパクパクさせて金魚みたいだ。

「で？何すればいいんだ？まさかおっさんに勝てばいいってのか？腰が抜けてもしらねーぜ？」

「慌てるなクソガキ。お前如きに私が相手するものか」

そう言うとおっさん——もとい校長は携帯を耳に当てて誰かと通話しだした。

数分後、部屋にノックが響いた。校長が「入れ」と言うとドアが開かれる。

入ってきたのは金髪を短く切った、いかにも体育会系の若い男だ

った。

「なんだよ親父？いきなり呼び出したりして」

「ヘイル。ちょっとこいつを懲らしめてやれ」

「は？」

親父と呼んだからには息子なのだろう。ヘイルは父親に言われたことを理解できていないのか、首を傾げていた。

「転入試験のことだ。このクソガキがお前に勝ったら転入といった形でな」

「ちよっ！？それはやりすぎだろ！？俺も一応ここの教師だぞ！？」

混乱しているヘイルを見ながら息子はまともなんだな、と一人で納得していた俺は、話がややこしくなるまえにまとめることにする。

「別にいいですよ。そこのおっさん、絶対折れそうにないですし」

「え！？ま、まあそうなんだけど……」

口ごもるヘイルに止どめの一撃。

「それに俺強いですし」

俺の自信過剰な態度にムツとしたヘイル先生は、予想通り俺に向き直る。

「……わかった。適性があるのであれば俺の方から推薦を出す。

その辺は心配しなくていい。じゃあアリーナに向かうか」

「わかりましたー」

いい人だな、などと感慨に浸りながら俺と一葉はヘイルについていく。後ろでおっさんが「ふん」と、鼻を鳴らしていたがスルーした。

愚親賢子。ふとそんな言葉が俺の頭をよぎったのだった。

episode 4 手品師じゃなくて魔術師ですよ

ヘイル先生に付いていき、校舎を出て五分ほど歩いたところにそれはあった。

「・・・東京ドーム？」

「アリーナだ」

我らが日本の比較対象と同じ大きさだと！？俺の反応に苦笑しながらヘイル先生はアリーナへと入っていく。

アリーナ内はとてつもなく広い。

魔法を使った模擬戦闘を行うための物なのだから広くて当然なのだが、どうしても「これ作るだけでも相当金使っただろうな」、などとここに来て何度目かの疑問を浮かべてしまう。

アリーナ中央まで到着すると、ヘイル先生は親切にも解説をしてくれた。

要約すると、このアリーナには上級魔法の結界が張り巡らされており、観客席から球技場に魔法を放つことができない。逆もまた然り。つまり暴れまわっても壊れないというわけだ。

もう一つは試験について。模擬戦形式で行い、相手を戦闘不能またはギブアップさせれば勝ちとなるらしい。

「——まあそんなところだ。審判はあそこにいる二人の教員にしてみよう」

ヘイル先生の指差す方向を見ると、黒髪と水色の髪の二人の女性が手を振っていた。

「じゃあ手早く終わらせよう。親父の説得には時間がかかりそうだしな」

そうやってさがる先生。完全に俺を見くびっているな。

心の中で少しイラついたそんな自分に軽く自己嫌悪して歩いていく男性を見守る。

15メートルほど離れたところで止まり、こちらに向き直る。

「ジェネレート」

そう呟いたヘイル先生の手が光が収束する。光が消えると手には斧が握られていた。

武装召還。

従来の魔法使いのような魔法書を持つて呪文を唱えるようなことは現在ではなくなった。魔法書の代わりとなったのが補助武装。特殊な加工が施されたそれらは、魔法が研究されて科学者たちによって作り出された言うなれば魔法の簡略装置。予め武器に術式を組み込むことで、発動速度を大幅に短縮するこれらには大きく分けて三つ存在する。

一つ目は特化型。

大量の術式を保存でき、魔法だけを使うことに特化した補助武装。精霊術師や召還術師、魔術オンリーの魔術師によく好まれる。

二つ目は武器型。

魔法を戦闘の補助として使う、現代で最もオーソドックスなものである。使える術式が少ない代わりに武器として扱われるという利点がある。

最後はそのどちらにも含まれない伝説武器^{レジェンダリーウェポン}。これは現代では実現不可能と呼ばれた二つを合わせた補助武装。古代の人類が作ったこ

れらは大量の術式を保存でき、武器としても最上級、それに加えそれぞれに解析できない術式が備わっているらしい。

ちなみに超能力者は補助武装を使わない。元々一つのことの特化した超能力たちは使う必要がないのだ。

ヘイルが握っているのは武器型の補助武装。太陽の光を浴びてキラリと光る刃を見るだけで手入れが行き届いていることがわかる。それを構えて俺に聞こえる声で呼びかける。

「おい！武器ださなくていいのか？」

「あー……わかりました」

言いながら俺は手に武器を呼び出す。光が収束していき一つの形となる。現れたのは銃。

「ほう。珍しいな」

ヘイル先生はまじまじと俺の手を眺める。少し居心地が悪い。

「ほら、ヘイル先生。戸惑ってるじゃないですか」

「確かに銃使いなんて珍しいですけど、ジロジロしすぎです」
女性陣二人がからかってくる。

彼女たちの言ったとおり銃使いは珍しい。剣などと違ってこちらは接近戦はできない。かと言って長距離なら特化型のほうが断然いい。銃の利点としては、その連続性。引き金を引けばそれだけで銃弾が飛んでいくため、補助武装によって魔法を纏わせればいいだけだ。

そんな中途半端な位置にいる銃を使う者はあまりいないのだ。

「むっ、すまんすまん。ついな」

ばつが悪そうに頭を掻くヘイル先生。悪気はないだろうから別に

いいんだが。

「じゃあそろそろ始めましょうか」

黒髪の女性教師がそう呟くと、俺とヘイル先生が睨み合う。場を静寂が支配する。

「始めてください」

先ほどの黒髪の女性教師が宣言するとヘイル先生が突っ込んだ。た。

ブウウオン!!。

胴に斬り込んできた斧を後ろに飛んで交わす。空を切る音だけでこんななのだから余程の威力があるのだろ。さすが教師だ。

再び斬りかかってきたところを銃で牽制。斧で弾かれるが動きを止めることには成功した。

ふう。あれ受け止めたら痛そうだな。

そんなことを思いながら俺はヘイル先生を観察する。

一見パワー型にも見えるのだが、スピードもそこそこあるようだ。魔法はまだ見ていないが身体強化はなかなかのものだろう。(身体強化とは魔力を体内で循環させて身体能力を向上させる技能のことだ。)

授業までまだ時間があるとはいえ、教師までそうだとは限らない。余り迷惑をかけるのもどうかと思うのでなるべく早く終わらせることに決めた。

再び突っ込んできたヘイル先生。魔力を集中させ、それを銃弾に纏わせるようにイメージする。

【炎属性添加：銃：纏^{まとい}】

武器型で最も用いられる属性添加魔法。名前の通り属性を物体に付与させる魔法だ。

炎属性の魔法を纏った弾丸はヘイル先生の胸に向かって飛んでいく。先生は斧を胸あたりに持って行き盾にしようとする。

「そんなの・・・」

無駄だ、と続けようとしたがすぐにそれは起きた。

バキィーン！！

甲高い金属の音がアリーナを包み込む。俺以外のこの場の三人が斧を見て呆然としていた。

弾丸は斧にひびを入れて制止していた。折ろうと思えば折れたが、それだとヘイル先生に貫通してしまう可能性があったのでそうしなかった。

驚愕から立ち直ったヘイル先生は再び2本目の斧を取り出そうとするが、それよりも早く俺は走り出す。

三メートルを切ったところでヘイル先生の武器が形を結び、俺に振り下ろしてくる。

バキィーン！！

再び金属の甲高い音が響く。今度は銃で打ったのではない。刀で切ったのだ。

先程まで何もなかったはずの右手に刀が握られていたことに再びヘイル先生は驚愕の表情を浮かべる。

マジック・トレース
瞬間展開。

武装展開をする際には必ずタイムラグが存在してしまう。武装展開は武器が自分の手に握られていることを想像し、それが明確に身を結んだところで別空間から呼び出すといったものだ。人間の思考には時間がかかる。だが俺には何故かそのタイムラグが存在しなかった。一葉にそのことを教えたら瞬間展開と勝手に名付けられてしまったのである。

もちろんこんなこと知らないヘイル先生は、刀を首に突きつけられていると言っのに未だ驚愕から抜けきっていないようだ。一葉などその反応を見て必死に笑いを抑えている。

「……驚いた。おまえはきつと手品師に成れるな。俺が保証してやる」

「俺は手品師じゃなくて魔術師だからな」

軽口を交えてようやく落ち着いたヘイル先生と向かい合う。するとどこから拍手が聞こえてくる。辺りを見回すと女性陣三人が手を叩いていた。

「いやー、すごいね。ヘイル先生ってAランク魔術師なのに」

「生徒に負けただってことは退職ですね。今までお疲れさまでした。辞表は今日中にお願ひします」

「ちよっ！それはさすがに……」

女性教師二人にいじられているヘイル先生を生暖かい目で見る俺。

そんな俺のところにトコトコとやってくる一葉。

「・・・瞬間^{マジック・トレース}展開まで使って良かったの？」

「まあ、どの道これは使わないと不便だからな」

「まあ、あんたがいいならいいんだけどね」

それで話は終わりとばかりに目を逸らす。少し俺より小さい一葉と一緒に未だにいじられ続けているヘイル先生たちを見守り続ける。

・・・あ、こけた。

episode 4 手品師じゃなくて魔術師ですよ(後書き)

戦闘描写難しいorz

感想お待ちしております。

episode 5 自己紹介で再会

その後、さんざんいじられてげっそりしたヘイル先生、いじりまくってつやつやしている黒髪女性教師——白貝清子先生しらがい きよこ——と、柔らかない笑顔を浮かべる水色髪の女性教師——ミレア・フォーカス先生——、俺、一葉で校長室へ向かった。

おっさんこと校長は最初俺が来たとき仏頂面を崩してニタニタしていたのだが、息子が負けたことを聞いて顔面蒼白に。終始不機嫌だったおっさんに、今度は俺がニタニタする番となった。

結局俺の転入は認められ、今は俺の担任となったミレア先生に教室へと案内してもらっているところである。ちなみに一葉は校長室で話があるとかどうか。

今はHR間際なので生徒の数が少ない。前を歩くミレア先生は柔らかな笑みを浮かべたままだ。

俺たちはそのまま時折会話を混ぜながら教室へと向かった。

「ちょっと待っててね」

そう言われて何分たった？いや、実際の時間はそんなにたっていないはずだ。じゃあなんてこんなに時が進むのが遅い。

緊張している？

ま、まっさかー。国際会議に出席した時でも緊張なんてしなかった俺に限ってそんなことはないだろー。あの時は黒スーツの怖いおっちゃんたちに睨まれてたのに。

あ、あれ？

なんか足がカクカクしてきたぞ？　ち、違う。断じて違うぞ。これは武者震いだ。そう、これから行われるだろう強敵たちとの激戦――。

「華瀬くーん。入っていいわよ」

「は、はい！！」

うわやばっ。声が裏変えっちゃった。

教室内からクスクス、ハハハ、などと笑い声が聞こえてくる。くそう、お前らも同じ立場に立てば俺と同じようになるんだからねっ！（ツンデレか俺はっ！！・・・はぁ）

つい自分にツツコミを入れてしまった。もうどうにでもなれ。俺は意を決して教室のドアを開けた。

「・・・ん？」

どうした？なんでみんなそんな口を開けて啞然としてんだ？

（え、ばれた？）

だが俺はマスコミの取材なんかは断っていたから外見だけでバレるはずがない。

頭に疑問符をいくつも浮かべる俺だったが、すぐに変化は起こった。

「き・・・」

「木？」

「きた~~~~!!!!」
「うおっ!?!」

いきなりの絶叫に比喻ではなく教室が揺れた。

「え?なにになに??」

あつと言う間に俺の周りに生徒が集まりだした。その中心は女子ばかり。

「あ、あのっ!彼氏とかいますか!?!」

「あ、ずるい真由!抜け駆けは許さないよ!」

「猿ばかりのこのクラスにとつとつ恵みが。神様ありがとう・・・」
「泣かないで結衣。これからは猿どもなんて気にしなくてすむんだから笑顔でいましょう」

『んだとこらああ!!』

男子の怒りを物ともせず、というより平伏させて騒ぎ立てる女子。意味がわからない。

もう頭の中は混乱を通り越してパニックだ。もうなにがなにやら。

そんな中一人の女生徒が人垣に埋もれながら俺の前にやってきて――。

「え?」

――いきなり抱きついてきた。周りからは悲鳴が上がる。あれ?・・・・

長い黒髪、表情は見えないが覚えのある髪留め、俺よりも頭一つ小さい背丈。
ポン。

いきなり胸を叩かれた。大して痛くは無いのだがその拳が俺の心に響いた気がした。

「も、紅葉!？」

「・・・悠のバカ。何も言わずに出て行って。心配・したん・・・だから」

切れ切れに発せられる澄んだ声。覚えてる、いや忘れるはずがない。

「・・・ごめん」

「・・・バカ」

顔を埋めてくるこの少女は波風紅葉^{なみかせ もみじ}。一葉の妹にして俺の幼なじみ。といってもそこまで付き合いが長いわけではない。

俺は一時期波風家に居候させて貰っていた。諸々の理由で情緒不安定になっていた俺を引き取ってくれたのが一葉だ。

そんなわけで俺は波風家に大変ご恩があるわけなのだが、その話はまたの機会に。

そんな感慨に浸っていると、周りの生徒は何が何やらといった感じで静まり返っていた。

「あー、すまない。自己紹介してなかったな。俺は華瀬悠希。紅葉の友人だ。これから一年間よろしく頼む」

先程の緊張などどこ吹く風、俺は場を収めるために改めて自己紹介する。そんな俺の対応のお陰か、生徒たちは平静を取り戻したの

か「よろしくね」「よろしく」などと返してくれた。

予想外な出来事が起こったがこれから騒がしくなるな、などと呑気にも思った俺だった。

episode 6 後でゆっくり話を聞かせてもらおうか♪

騒がしい自己紹介を終え、生徒たちがそれぞれの席に散っていく。紅葉も名残惜しそうにしていたが俺が言うのと渋々戻っていった。俺はというと、ミレア先生に促された席へスタスタと歩いていった。

「よつ。俺は黒崎ライラ、ライラでいいぜ。半分日本人の血が入ってるけど出身はドイツだ。よろしくな」

丁度席についたとき前の席から声をかけられた。そこに居たのは銀髪黒目の人懐っこそうな少年だった。

「ああ、よろしくなライラ。俺は……自己紹介したっけな」
苦笑しながら頭を掻く。

「悠希でいい。出身は日本だ」

そう言っただけで握手を交わすと、ライラは満足したのか満面の笑みを浮かべる。

「私も隣だからよろしくね、悠」

隣から声をかけてきたのはもちろん紅葉。こちらも満面の笑み。

「ああ、よろしくな」

俺が言うのと同時に授業開始の鐘が鳴った。

退屈だ。

今は魔術学の時間。この学校では魔術師、精霊術師、召還術師、死霊術師、超能力者の線引きは無い。現にこのクラスでもこれらの術師が混ざり合っている。授業も一緒、模擬戦も一緒、寮も一緒。こっうやって他の術師への偏見を無くしていく目的なのだろう。いいアイデアだと思う。思うのだが。

退屈だ。

今日何度目かの呟きを心の中で吐き続ける。

レベルが低い。そう思った。

ここはほぼ強制的に小学生から入学させられるため、エレベーター式がほとんどだと言っていたのでそこそこ面白い授業かと期待していたのだが。

授業終了まで残り三十秒。だが一秒一秒が長い。まるでさっきの自己紹介前のような感覚だ。

15、14、13、12…………。

そう言えば昨日追われてたときもゲートまでの距離を数えてたなあ、などと下らないことが頭をよぎった。

10、9、8、7、6…………。

残り十秒を切った。早く追われ早く追われと念じ続ける。

5、4、3、2、1…………。

「ゼロ」

キンコーンカーンコーン。

呟くと同時に終令になる。号令をして教師がでていく。授業が終わった。

「終わったー・・・」

「おつかれー」

机に突っ伏す俺、苦笑しながら振り返るライラ。

「昼休み終わったらまたあるんだけどね」

と、紅葉。うげえ、まだあんのかよ。

「昼飯どうする？俺腹減ったわ」

突っ伏したままポツリと呟く。早くこの体力を回復しなければ午後まで持たない自信が俺にはある。

「あ、ちよつと待って、もう少し——」

紅葉が言い終わる前に教室のドアが勢いよく開かれた。クラス中がそれに注目し、俺たちもそちらに振り向く。

黒髪を肩ぐらいで切りそろえ、前髪も揃えた可愛らしい少女が息も絶え絶えに立っていた。

その少女はこちらを見ると小走りにやってくる。

「悠お兄ちゃ〜ん!!」

「げふっ!?!?!」

いきなり飛びついてきた。お陰で俺は真後ろから倒れ、頭も強く打った上に鳩尾に頭が入ってしまった。

きつと俺の頭には多数の星、またはひよこが回っていることだろう。

「さ、桜っ!!悠ぐったりしてるっ!!!」

「わわっ!!どうしようお姉ちゃん!?!」

そこからどれくらいくれるだけですごくありがたい。

テンパっているこの少女は一葉と紅葉の妹の波風桜。なみかぜ さくら おっちょこち

よいなんだか確信犯なんだか天然なんだかよくわからない子だ。
現在、俺の上、もつといえは鳩尾に桜が座っている状態。桜が動く度に膝が入ってももの凄く痛い。

だが、幸か不幸かこの体制だと桜のスカートの中身が見えてしまいそうなのだが。

（いやいやいかなだろ！？相手は桜だぞ！？）

妹のように接してきた桜にそんな下心を向けていいはずがない！！
いくら美少女だからといってもこれだけは譲れないっ！！

「あつ！ご、ご、ごめんなさいっ！！」

するりと俺から降りる桜。

ふう、危なかった。色々な意味で。

「ご、ごめんねお兄ちゃん。お姉ちゃんに念話でお兄ちゃんが帰ってきたって聞いていてもたっても居られなくて・・・」

上目遣いで見つめてくる桜。そんな捨てられた子犬みたいな目で見つめられると怒るもんも怒れないではないか。

「・・・いや、俺も突然いなくなったりして悪かった。心配かけた」
頭を下げる、すると再び桜に抱きつかれた。

「・・・もうどっかいつちや嫌だよ・・・もう、戻ってこないかも
って・・・」

嗚咽を漏らす桜の頭を撫でてやる。柔らかい髪を梳くとミントの香りが広がってくる。俺は昼飯を蹴っつてもそのまましていると決意した。

結局桜はすぐに泣き止み、俺、ライラ、紅葉、桜の4人は学食で昼食を取るようになった。

この学園は人数も尋常じゃないらしい。現にバカでかい学食内は人で溢れかえっている。俺たちは奥の空席を見つけ、桜とライラに場所取りを任せ、俺、紅葉は食券を買いに行くことになった。

「・・・ねえ」

販売機の列に並んでいると紅葉は深刻そうな顔でこちらを伺っていた。

ああ、なるほど。

「なんで出て行ったのか、だろ？」

俺が先回りして言うとかクンと一回頷いた。

「別に。任務で出てただけだ」
嘘を吐いた。

「・・・そう」

紅葉が背を向けると同時に俺の体を刺すような痛みを伴って罪悪感が沸き上がってくる。

ごめんな。

言葉にしなければわからないとわかっているのに俺は心の中で呟いた。

俺たちはテーブルを囲んで昼食を取る。だがしかし・・・。

「なんかさっきからジロジロ見られて落ち着かねーな」

「そうかな？」

桜が可愛らしく首を傾げる。なんだかりスみたいだな。別にシスコンじゃないんだよ？

兄妹ではないから別にシスコンではないのだろうがそれはそれ、これはこれだ。

因みにみんなのメニューは桜と紅葉が鮭定食、ライラが肉うどん、俺がエビフライ定食だ。

「そりゃー、高嶺の花と今まで数々の男共が挫折してきた波風と中学トップの美少女の桜ちゃんと一緒に昼食なんて、この学園都市在住の生徒に喧嘩売ってるようなもんだしな」

「あー、納得」

この幼なじみ二人に適う美少女なんてそうそう存在しないだろう。

彼氏の一人や二人できてもおかしくないんだがな。

「私ってそんなに話がたいかしら？」

「多分な。俺は小学からずっと同じだったから気にならないけど」

紅葉が不満そうにライラを睨む。そうか二人は小学から一緒・・・。

「は！？マジで！？」

何？ってことは彼氏彼女てきな関係でも――。

『違うつー！！』

「うおっ！？」

思考を読まれただど！？身を乗り出し、二人共顔を真っ赤にしながら詰め寄ってくる。え、エビフライが落ちるって！！

「なんで私がこいつと付き合わなきゃならないのよ！！」

「そうだぜ！！好きだったのは中二までで、今はどうも——」

場の空気が凍った。いやマジで。自分の失体にようやく気付いたのか、赤面を通り越して蒼白になったライラに俺は慈愛の笑みを浮かべる。

「ライラ」

「ゆ、ゆうき」

涙目ですがりついてくるライラ。

「後でゆっくり話を聞かせてもらおうか」

「・・・・・・・・・・イイイヤアアア！！！！！」

食堂内に絶叫が響く。

俺の笑顔は無慈悲な天使のそれだった。

「・・・・・・・・俺が惚れてたのは小5のときだった」

精気の無い瞳で罪を告白するがごとく一方的な恋バナが始まった。

場所は寮の俺の部屋。

授業が終わって放課後、ミレア先生に寮について聞いたところ、1708号室を使っていいとのこと。偶然にもライラの隣で、この真上が紅葉と桜の（姉妹ということで同室）部屋だ。

そんな俺たちが何故俺の部屋に集まっているのかというと、ライラの暴走によって思わぬいじりネタを見つけたからである。

手筈はこうだ。

まずライラを捕獲。止めに来た紅葉を魔法で拘束。実にシンプル、そして堅実的だ。

予定通りライラを捕獲し、紅葉を拘束。部屋の隅でウーウー唸っている。桜はというと、意外にもこの手の話が好きなのか目をキラキラさせてライラの話の聞こうとしている。

そして色々尋問——もといいお願いをしたらすんなり口を割り出したのだ。

「その頃の紅葉は、すげー明るかったんだ。一回聞いたんだ、なんでそんなにテンションたけーのかって」

「波風」って呼んでたのに今は「紅葉」なんだな、と思ったが口にはしない。

「そしたらさ、あいつ『王子様が助けてくれたの』、って嬉しそうに言ってる。そんなときはその誰とも知らないやつに嫉妬したよ。でもいつか俺が紅葉を守ってやるって決心して対抗心燃やしたっけな・
・・」

自嘲気味になってきたライラ。なんだかかわいそうに思えてきた。それにしても王子様ねえ、そんなやついたのか？

「でも、中二んときには変わっちゃまって、いつも寂しそうに俯いて

たんだよ。表面は笑ってるけど内心は泣いてる。そんときに確信した。あいつがどこかに行ったんだなって」

だんだんシリアスになってまいりました〜！

さて中二ね・・・俺と同時期に紅葉の前から消えたやつってことか。

「こうなったら俺が紅葉を守ってやる。ついにその時が来たって思っ
て、思い切って告白してみたんだ」

おおー！！

「結果は見事撃沈。そんときのセリフがこりやまた傑作で『私はあ
の人を待ち続けるから』だってよ。そこで俺の初恋は終わっちまっ
た」

話終わると魂が抜けたようにその場でボーッとしだすライラ。紅葉
のほうは・・・。

「おーい、紅葉？」

「・・・・・・・・」

返事がない、ただの屍のようだ。

桜はというと、うっとり肌をツヤツヤさせている。よっぽど満足
だったんだな。

こうしてこの第1回恋バナ選手権は幕を閉じた。

episode 6 後でゆっくり話を聞かせてもらおうか♪（後書き）

感想お待ちしております。

episode 7 強者の余裕

「おつす!」

「……………おう」

部屋を出ると、ちょうどライラと鉢合わせになった。だが、俺が声をかけてやっているのにまったく元気がない。

「どうした?俺が声かけてやってるんだから元気出せって」

「いや、寧ろ朝からテンションだだ下がりだ。どうしてくれるこのやろっ」

む、俺の何処に不満要素があるんだ。この心優しい――。

「ならば聞こう。お前は昨日俺に何をしたでしようか」

こ、こいつ読心術の心得でもあるのではなからうか?

「え?昨日?うーん。鬼ごっこ?」

「その小学生みたいなごまかしで通用するとおもってんのかよ。ちなみに読心術なんてやったこともない。お前は考えてることが丸わかりなんだよ」

な、なんだってー!?

うーん、このリアクションはイマイチだな。

そんなバカな考えは置いといて、俺ってそんなにわかりやすい性格しているだろうか?自分ではそんな風におもったことないのだが・。波風姉妹には何故か読まれるのでそういう血筋かと真剣に考えたこともあったのに。まあどうでもいいっちゃいいんだが。

「ほら、気にすんなって。過去を振り向いてばかりでは前に進めないぞ!」

「振り向かせる原因になったお前に言われたくない!」

朝から近所迷惑も考えず騒ぎながら学校へ到着。

「だから土属性の魔法は近接戦の補助としてばかり使っんじゃ無くてだな」

あれ？なんか最初の時と違って俺の魔術講義が始まっている気がするのだが。

「いや、でもよお——」

「あ、紅葉おはよー」

ビクウツ！！

「ん？どうした二人共？」

『いやっ！な、なんでも、ないっ！』

声が裏変えった。なんでこんなに焦って——。

「あー、昨日のことか」

ビクウツ！！

また反応した。

つまり昨日のぶっちゃけトークのせいで気まづくなっちゃった、というのか。

「まあ気にすんなよ、な？」

『誰のせいだ！！』

「え？俺のせいなの？」

あくまで白を切る俺。それを涙目で抗議してくる二人。数分間そんなやりとりをしていると我らが担任のミレア先生がやってきた。

「はいはい。席についてくださいねー。HRを始めますよー」

間延びした声に渋々席に戻る、といっても前と左だからあまり関係

無いのだが。

「では今週末からの学年別トーナメントの話をします」

「・・・・・・は？」

え、何それ？なんでみんな何も言わないの？

「あー、華瀬くんには言ってますでしたね。この都市では学期末に学年別に各校舎一纏めにしてトーナメント戦を行うんですよ。こんな時期に転入してきても例外はありません」

「は？各校舎？」

何それ、高校ってここだけじゃないの？

「ええ、この学園都市には高校、中学、小学それぞれ26の校舎があるんです。ここは第11高校。ちなみに大学は専門機関などあるので64となっています」

「知らないんですか？」と言うような目で見てくる先生。に、26！？ていつかここ第11なの？それすら初めて聞いたんですけど。

まあとりあえず。

「せんせー、めんどくさいんで休んじやうかもですけどいいですかー？」

うん、やっぱりめんどくさそうなもの。

「別に構いませんけど、実技の成績がなくなりますよ？」

俺の策を軽々つぶしてくれちゃったミレア先生。げ、それは一大事。

これで夏休み補習なんてなったらたまったもんじゃねーぞ。せつかく夏休み前に転入してそのまま夏休みを満喫、なんて夢い夢を抱かせていたのに。

「ちなみに一位になると実技の単位がものすごく貰えますよ?」

ピクッ

「もう一年間分は余裕であるぐらいの」

ピクピクッ

「そうですか、出場しませんか。それは残念です」

「せんせー！自分、スポーツマンシップにのっとって、目の前の戦いを背を向けるような真似はしません！」

『うおおおい!!』

なんか周りから非難の声が上がった気がするが無視。今の俺の目にはもはや単位しか映っていない。道を阻む者は誰だろうと捻っちゃうよ、俺。

「まあ頼もしい。では、そろそろ終わりにしますね」
あとになって、俺はミレア先生の策にまんまとはまってしまったことに気付いて泣きたくなってしまったのだった。

まあ、単位貰えればいいか。

3 限目、模擬戦闘実習。

この時間はアリーナで魔法を用いて戦闘をするといった授業らしいらしい、というのは俺が今までそんなのを受けたことなかったからだ。

「なあー、俺とやろうぜ？」

「えー、なんでライラと？」

「失礼にもほどがあるだろっ！！」

ライラが言ったやろうぜとはもちろん模擬戦のことだろう。だが何故かいきなりキレだした。わけのわからんやつだな。

「ゆう、私とやらない？」

「ん？紅葉か。いいぞ」

『えゝっ！！』

な、なんだお前ら？なんで俺が紅葉との模擬戦を承諾したら『えゝっ！！』などと驚かれなければならないんだ？

首を傾げる俺を見かねたのか、ライラが補足説明をしてくれた。

「波風は中学のトーナメントで6位になってんだよ。そんなやつが転入生をいきなり誘うつてのが驚きなんじゃね？」

あれ？紅葉じゃない。なんてのは置いて、こいつより強い奴が
同学年に5人もいるんだ、などと全く見当はずれの考えをしてい
る俺。

そんな俺の態度をどう解釈したのか心配そうにしているライラ。

「んー、多分大丈夫だろ」

「んな突拍子もないことを・・・」

半ば呆れ気味に溜め息を吐くライラに「まあ、見てろって」と言い
放って紅葉の下に向かった。

・・・ちよつとくさいセリフだったかな？

episode 7 強者の余裕（後書き）

みなさんお気に入り登録ありがとうございますっ！！

本当にうれしいです！！

感想お待ちしております。

episode 8 いいこと（前書き）

瞬間展開の読みを

マジック・トランスから

マジック・トレースに書き換えました。

今までそれを見てきた方、ご迷惑をおかけしてすみません（泣）

episode 8 いいと

俺と紅葉は20メートル程間隔を開けて向かい合う。さっきまで模擬戦をしていた生徒も学年6位の紅葉と転校生の勝負と聞いて集まり始めていた。

「ルールどうする？」

紅葉が問う。

このアリーナに殺傷生のある物理攻撃、魔法は全て受け流される結界が張られているらしいのだが、怪我をしないというものではない。最低でも骨折まで抑えてくれるというだけだ。

だが、その程度の怪我ぐらいなら今の医療で直ぐに治る。なので本気でやり合っても普通は大丈夫なのだ。普通じゃなければ問題大有りなのだが。

「んー、フリーでいいだろ？」

フリーっていうのはルール無しなんでもありのことだ。

まあ俺はあくまで結界の許容範囲内で。

「りょーかい」

言わずとも理解したのだろう。少し不服そうではあるが、すぐに集中し始める。

すでに俺たちの周りには沢山のギャラリが集まっている。さて、そろそろ――。

「「ジエネレート」」

俺たちは同時に武器を展開する。

紅葉の手に光が収束し、太陽の光で鮮やかに光る刀が現れる。

一方俺は両手に二丁の銃を展開。今回は二丁拳銃のオンリースタイルだ。

俺の手に銃が現れた瞬間ギャラリィからざわめきがおこる。

そんなに珍しいのか？慣れれば結構使いやすいんだが・・・。

少々残念な気もするが、まあ取り敢えず置いておこう。正面には刀を構えた紅葉の姿が・・・げっ！目がマジじゃねーかつ！
軽く流そうか、などと考えていた俺とは真逆に彼女は随分気合いが入っている様子。どうしたものか。

「じゃあ俺が審判するぞ？」

ライラが審判に立候補してきた。

「いや、帰れ」

「お前俺にひどくねっ!？」

もう半泣きですがりついてくる勢いで見つめてくるライラ。

「ちっ、しかたねーな」

「俺お前になんかしたか!？」

ごほん、とわざとらしく咳払い。弄ると楽しいなこいつ。

「じゃあカウント始めるぞ? 5・4・3——」

なんだか紅葉から殺気を感じるんだが気のせいだろうか？まあいつも殺す気で来いってたのが原因だろう。そうだと願いたい。

「——2・1、始めっ！」

ライラの宣言と同時に紅葉が突っ込んで——。

「はや——」

言い終える暇も無く20メートルの距離が一気に詰められ、様子見だろう横薙の一閃。

それを後ろに飛んでかわすが、再び詰められ切り込まれる。

「うおっ!？」

交わしても交わしても距離を詰められては斬られかける。いたちごっこになってきた。

「——っ!？」

突如紅葉の魔力の流れが変わった（普段垂れ流している魔力から、魔法を使う際に魔力を集中して体外に漏れることに変わる事）。周りの連中には気付かない程の抑えられた変化だが、これは。

「いやいや!!!それはちょっ——」

言い終わる前に紅葉は居合い切りを放つ。だが、先程と違うのは斬線が飛んでくる上に、それに風属性と雷属性の魔法が混じっている

ことだ。地面を蹴り上げ、空中に飛ぶ。

「ばっか！いきなり複合魔法ぶっ放すやつがあるかつ！」

「ゆうにはこれぐらいやらないと勝てないでしょっ！！」

なんか怒鳴られた……。

複合魔法とは、その名の通り別々の属性を組み合わせ一つにした魔法のことだ。普通は高校三年生ぐらいからカリキュラムに含まれていると思うんだが。まあ、一葉の妹なのだからこれぐらいどうってこともないだろう。

今紅葉が放った魔法“風花雷塵”は、風属性と雷属性の複合魔法だ。あんなの食らったりしたら普通は一溜まりもない。

（やっぱり紅葉相手に銃はきつかったか？）

舞の如く振るわれる刀を全て紙一重で避けながら、俺はそんなどうでもいいことに思考を傾けていた。

（うーん……）

どう反撃しよう……。こっちは銃だし、距離を取らないことには――。

（……いや、そうでもないか）

ちょっといいこと思いついた。

その“いいこと”を実行するために魔力を集中させる。

「——っ！！させないっ！！」

俺の魔力の流れが変わったことに気づいたのか、先程より斬線の数が増す。でも。

「好きだらけ」

周りから見るとふざけているように見られるだろう間抜けな声を出して右の銃の引き金を引く。

ズガン。

魔力でコーティングされた普通の銃弾が紅葉の腹部に当たる。身体強化をしてるだろうし、結界もあるからこれぐらいの威力なら問題ないはずだ。

だが、衝撃で数秒彼女の動きが止った。そして予め集めておいた魔力を使い、術式を発動させる。

【氷属性添加：銃：纏・氷結・】

引き金を5回連続で引く。5発の弾丸が全て紅葉——の足下と刀に着弾。

ギャラリーの中では「はずれた!？」なんて言ってる的外れなやつがいる。俺から言わせて貰えば“はずれた”のではなく“命中した

”のだが。

着弾と同時にその部位に冷気が散り、一瞬で周りの水分が凝結。足下や刀が凍り付き、瞬く間に動きを封じる。

もつともポプラーな魔法“纏”ではあるが、その中でも派生系が存在する。普通の“纏”はただ属性をのつけて威力を上げたようなものだが、派生系はそれぞれにオプションを加えた便利な魔法だ。俺の放った“氷結”もその一つで、着弾点付近を凍り付かせる能力がある。

俺は身動きがとれなくなった紅葉に、武器を解除して近づいていき、

「チェックメイト」

そう言い放って指で銃を作り、額に当ててニコリと微笑む。

「はあゝ、降参する……」

溜め息を吐いてそう吐き捨てると、茫然としていた審判のライラが慌てて取り仕切る。

「し、勝者、華瀬悠希っ！」

同じく茫然としていたギャラリー共がその言葉で正気に戻ったのか、途端に歓声を上げた。した。

そんなことを無視して俺は紅葉にかけた魔法を解いてやる。氷が散

り、やっと動けるようになった足を屈伸で解して武装解除する紅葉。

「いやー、強くなったな。最初するときなんてびっくりしたぞ」

「それでも勝てないなら意味ないよ」

口を尖らせて拗ねる彼女に苦笑しながら頭をポンポンと叩く。

さて、取り敢えずこの場をどうやって収集するか考える俺だった。

episode 8 いいこと（後書き）

感想お待ちします

episode 9 嘘

紅葉との模擬戦の後、クラスメートたちの質問責めを華麗にスルーしてライラを弄って適当に時間を潰した。

・・・何かに目覚めかけている気がするが気のせいだろう。

そんなこんなで時は昼休み、場所は食堂。

俺、ライラ、紅葉、それと中等部からわざわざやってきた桜と一緒に食事に勤しんでいた。

今日のメニューは、俺がざるそば、ライラがまたも肉うどん、紅葉と桜が昨日の俺と同じエビフライ定食。

「そう言えば高等部のトーナメントって今週だったよね？」

唐突に桜がそんなことを言い出した。

「ああ、そうみたいだな」

取り敢えず頷いておく。まあどんなのか知らないけど。そんな俺の心情を察したのか、紅葉が補足してくれる。曰わく。

「当日はケータイ端末に開始時刻、次の対戦相手と場所が随時送られてくるの。全高校が参加するから、アリーナからアリーナに移動なんてこともザラにあるわ。だからトーナメント期間中はゲートも

解放されるの。転移してバトって、また転移してっとなるから気をつけてね」

だそうだ。

「うわっ！めんどくさっ！」

「単位は？」

「うっ」

それは欲しい……。くそうっ！！

ニヤニヤしながら見てくる紅葉とライラ。今朝のやり取りを知らない桜は何がなにやらといった様子だ。

「ん？そついや期間ってどんくらいあんの？」

「進行状況にもよるけど土曜日から始まって10日ちょっとあれば終わる、なっ」

ちっ、肉貰おうと思ったら弾かれた。

なるほど10日ね。長いな、めんどいな、でも単位は欲しいな。

「そんな甘いこと言っていないで、少しは特訓でもしたら？」

「ん、まあそうなんだけどな……」

なんだかやる気でないんだよね。

『学年一位は伝説武器保持者なのよ？一回戦ったことあるけど、むちゃくちゃだったんだから。ゆうは“フランクス”とか“影月”とかも使っつもりないんでしょ？』

ぐーたらな考えを浮かべていたら急に頭の中に声が聞こえてきたの

で少しびっくりしたが、ライラと桜にはまだ話せ無い内容も混じっているのを助かる。

『伝説武器持ち？そんな大物がここにいんのか？』

これは驚いた。

伝説武器には普通の補助武装と違っていくつか特殊な性質がある。

その一つが保有者の選択。

伝説武器は所有者を選ぶ性質がある。その判断基準はそれぞれ異なり、ある物は強さ、またある物は強靱な精神力といった具合にだ。それを普通の高校生が扱えるとはね。

それとも俺みたいな異端の存在なのか。

そんな感慨に浸っていると、先程の問いの答えを返していないことに気づいた。

『ん、まあな。あんなのポンポン持ち替えてたらさすがにまずいだろう？』

それが答えだ。

『せめて一個ぐらいは使ったら？』

『この名前だけでも怪しまれるかもってビクビクしてんだ。それに伝説武器保持者なんて今時ググれば一発で出てくる』

『・・・そう』

それだけ交わすと念話を切る。

それから食事を終え、適当にだべって昼休みを平和にすごした。

「はぁ・・・」

自室に戻るなり紅葉はベッドに飛び込んだ。妹の桜は日直で少し遅くなるらしい。

そんな中ふと昨日の昼の悠希の言葉を思い出す。

『別に。任務で出ていただけだ』

「・・・嘘ばかり」

私は別にゆうみみたいな鈍感じゃない、気づいてないとも思っただろうか。

でもそれを問い詰めるわけにもいかない。何か無闇に聞いていい話では無い気がしてならないのだ。

もやもやする感情を持て余していると、机に置かれたケータイの着メロが鳴った。

「姉さん？」

『もー、お姉ちゃんって呼んでもいいって言ってるのにつー!』

なぜかいきなり叱られてしまった。こんなバカなことを一言目に発するバカはもちろん一葉姉さんだ。

「きるよ」

『ちよつとま——』

構わず切る。するとまたすぐに着信がかかってきた。

「・・・なに？」

『ひどいよ紅葉ー、いきなり切るなんて。お姉ちゃん悲しい』

電話越しに啜り泣く声。勿論演技に決まっているのだが。もう一度切ってしまうおか？などと本気で思っていると、泣き声が止み、変わりに真剣身を帯びた声が響いてくる。

『・・・今から理事長室に来てちょうだい。大事な話があるの』

「大事な話って？」

思わず聞き返してしまった。無駄だとわかっているのに。

『・・・来ればわかるわ』

案の定はぐらかされてしまった。とりあえず肯定しておいて電話を切る。

桜に「ちよつと出かけてくる」とメールを送り、外出届を提出して寮を出る。

空は薄暗く染まり、昼間と比べれば大分涼しい風が肌に触れた。

ここから都市庁までそう遠くは無く、ゲートを使う必要も無い。

私は歩いて都市庁まで向かった。

都市庁に付くと、すぐに警備員に通された。

エレベーターで最上階に上がり、廊下を真っ直ぐ突き進むと、一葉のいる理事長室に到着する。

「姉さん、入るよ?」

「はいはい」

さっきの真面目な声はどこに行ったのやら、間延びした一葉の声に促されドアのノブを回す。

「いらっしやうい」

中に入ると二人用ソファーに寝転がって足をバタバタさせている姉の姿が、そこにはあった。

「失礼しました」

「ちよつと紅葉っ!?!ごめんごめん!もうふざけないからっ!ねっ!?!」

腕を掴みながら涙目で謝罪してくる姉の姿を見て、なんだか悲しく

なってくる。

「で、なんなの？」

「うん、大したことじゃないんだけど……」

「さて、桜が待ってるから」

「待つて待つて!!」

一体なんなのだろう？大したことないなら早く帰りたいのだが。目で催促すると、「あゝ」「うー」などと奇怪な声を上げる姉。やがて意を決したように口を開いた。

「……悠希になにか言われた？」

その言葉を聞いた瞬間言いようのない不安感が押し寄せてきた。なんでかわからないけど。

「姉さん、ゆうに何があったのか知ってるの？」

「質問に答えて」

真剣な表情で問い詰めてくる一葉に、私は首を横に振る。

「……ううん。何があったのか聞いたけど、答えてくれなくて……」

「そう……」

沈黙が訪れる。

しばらくすると一葉から口を開いた。ただ、それは予想外の一言だった。

「どうする？教えてほしいなら私の知ってる範囲で教えるけど？」

「えっ!？」

その一言に驚愕していると、一葉はそんなことお構いなしに続ける。

「知りたいんでしょう?どうするの?」

その問いに、私は数秒悩んだ。やがてある疑問がよぎる。

「それは、ゆうも良いつて言ってるの?」

じゃあなんであの時に言わなかったの?

そんな早とちりした考えとは裏腹に、一葉は首を横に振った。

「いいえ、でも紅葉が知りたいなら教えるわよ?」

再びの問い。

だがその瞬間答えは決まった。

「ううん。教えなくていい」

そうだ。教えてもらわなくてもいい。

「どうして?」

優しく尋ねる姉に、私は笑顔で答える。

「だってゆうが話さないってことは、まだその時じゃないってことだもん。私の興味本位でゆうを傷つけるなんて絶対嫌。ゆうは色んなもの背負ってきてるのに、私が足を引っ張るなんて絶対嫌よ」

そうだ。

死ぬはずだったゆうは私を助けてくれた。それが偶然だったってこともわかってる。

でも私は生きてる。

ゆうのお陰で生きてる。

だから私はゆうを守りたい。少なくともゆうが自分の背負った物の重みで潰されないように支えていたい。

「だから私はゆうが自分で言い出すまで待つてる」

私はゆうを信じてるから。

「・・・もう雅人がいなくても安心ね」

「え？」

何か聞こえた気がしたのだが一葉は「なんでもない」と手をひらひら振っている。

気のせいかな？

その後くだらない話に突入しそうになったので、適当に切り上げて寮に戻る。

さっきまでのもやもやが晴れた、そんな気がしたのだった。

トーナメントまで残り4日。

episode 9 嘘（後書き）

感想お待ちします。

episode 10 推薦枠？

7月17日水曜日。

トーナメントまで後三日ということもあって、そろそろ準備が始まりだしたようだ。

何やら屋台も並ぶとか。

そんな今この頃。

サンサンと降り注ぐ太陽の光が心を清々しい気持ちに――。

「なわけあるかつー!」

「うおっ!？」

――させるわけなかった。

いきなりキレだした俺を何こいつ、みたいな目で見てくるライラ。

俺が今イライラ（ライラじゃないよ？イが多いよ？）している理由を、一言で表すと“暑いから”だ。

「暑いんだよー! 離れるライラー!」

「俺のせいだよ!? いい加減にしる悠希ー!」

「うるさい黙れ鉄板野郎っ!」

「そこまで熱籠もってねーよ!」

こんな道のと真ん中で俺たちは何をしているのだろうか？

通り過ぎていく生徒たちは皆俺たちを可哀想な物でも見るような目

を向けてくる。

「・・・そんなことしてるより早くクーラーの効いた教室に行けばいいのに。」

「あゝ、生き返るゝ」

「大袈裟なやつだなー」

そう言いながらもライラも満更ではなさそうだ。

場所は教室。

あれからあーだこーだ言い合いながらもようやく到着して、今は涼しい教室でくつろいでいるところだ。

「しかし、あの波風に勝っちまうとはなー」

「またその話か・・・」

げんなりしながら机に突っ伏す。あー、机が冷たくて気持ちいい。

昨日はそのことについて鬱陶しいくらいに聞かれ、そのたびに誤魔

化してきたのに。

「昨日も言ったが、あいつとは古い付き合いなんだから行動パターンはある程度わかるんだよ。そのせいだ」

「いや、それでもすげーよ。あいつに勝てるやつなんて同学年に5人いるかいなかだしな」

「わかった、わかったから」

俺としてはあいつに勝てるやつがこの都市に5人もいることが驚きなんだが。

「そついや一年だけトーナメントするってことは上級生はどうすんだ？この都市の一年生っていったらそれだけでアリーナ全部使っちゃうんじゃないの？」

そんな疑問が頭をよぎったので取り敢えず聞いてみる。

「あー、お前って転校生だったな。あんまり馴染みすぎてるからついこの前転入してきたことなんて忘れてたぜ。」

む、どういう意味だ？

「上級生の話だったな。俺もあんま知らないんだけどさ、二年生からは定期的に集団演習つてのがあらしいんだよ。それって魔獣指定区域に行って実際に魔獣と戦ってみるっていう危ない授業でさ、単独じゃ危険だから二、三年混合でチーム組むらしい。有望な生徒をスカウトするための品定めするとかどうとかじゃないか？」

「へー、意外と面白そうな授業あるんだな」

魔獣ってのは人間が魔法を使えるようになったときにいきなり現れだした生物のことだ。性格は大体のやつが好戦的。外見がうさぎみたいな魔獣でも熊を食ったりするぐらい怖いし強い。

魔獣指定区域ってのは魔獣が集団で生息してる場所のこと。一般人は立ち入り禁止になっている上に、その近辺10km範囲に住み着くことは法律で堅く禁じられている。

ちなみに召還術師はその魔獣を手懐けて戦わせる術師のことだ。

俺も任務でたまに指定区域に入って行って適当に数減らしてたな、などとどうでもいいことを考えていると、ふと疑問が浮かんだ。

「ん？それじゃあ三年は関係無いんじゃないのか？俺たちが二年に入るころには卒業してるわけだし」

「いや、そうでもないんだな、これが」

「は？なんで？」

今言ったことなら俺たちがその集団演習ってのをやるのは二年生からのはずだ。

そうじゃない？

頭に浮かぶ疑問が泡のように浮いてははじけ、また浮いてははじけていく。

「なんでも“推薦枠”ってのがあるらしい」
「推薦枠？」

なんじゃそりゃ？

「一年のトーナメントで十位以内に入って、どっかのチームリーダーに推薦してもらえればそのチームに入れるんだと。だから三年も観戦しにくるみたいだぜ」

「ふーん。じゃあ紅葉もその集団演習つてのやったことあんのか？」

俺が問うとライラが首を振る。

「さっき言っただけど一年だけだ。中学の時は含まれねーよ」

「あー、なるほどな」

じゃあ無理だわな。

いくら強くても経験の無い子供が魔獣と殺り合ったら命を落とし兼ねない。

紅葉が普通の魔獣と戦って死ぬとは思えないが、何が起っても取り替えしがないのが魔獣指定区域だ。

内心でその校則を作った人に感謝していると、ライラが思い出したように呟きだした。

「・・・そう言えば去年その校則について一騒動あったっけな」

「騒動？」

「あつたわね、そんなこと」

いきなり後ろから声をかけられて心臓が飛び出しかけたが、なんとか表情に出さないように自制できた。

後ろを振り向くと、今日はその長い黒髪を後ろで纏めた紅葉が立っていた。

「おはよう、紅葉。で、何があつたって？」

「おはよ。なんか去年中3の一位になった子を自分のチームに入れて
させてくれ、て言い出すリーダーたちが沢山いて、まあ結局無理だ
ったんだけど」

「へー、確かレア持ちなんだっけ？」

レア持ちっていうのは伝説武器保持者の略称のことだ。他にも伝説
武器をレア武器、と言ったりする。

「そうそう。確かにあの子ぐらいのレベルなら三年にもそうはいな
いと思う」

「へー、そんなにか」

そんな奴保持者にいたっけ？

一人だけ思い浮かぶんだが、あいつは軍隊所属のはずだしなー。

あ、でももう一人いるにはいるんだが、やっぱないな。

「まあ伝説武器保持者ってこの都市に4人もいるんだけどさ、やつ
は自分のチームにほしいつてもあるんだろっな」

「へー、そんなにいんのか」

すみません、5人です。

しかし俺のけて4人ねー。何人が会ったことありそうだが、自分か
ら会いに行く気なんてさらさらないので取り敢えずスルー！。

そうこうしているとHRの時間がやってきた。ミレア先生の話が終
わり、授業が始まる。

集団演習。

推薦枠。

そんな単語が頭の中を蹂躪して、授業なんて身が入らない。
単位のためとか思ってたけど、とんだびつくりイベントがあったもんだな。

つい頬が緩む。

これから楽しくなりそうだ。

episode 11 コーチ

「私に魔法を教えてくださいっ!!」

「……はい?」

昼休み。

今日もライラたちと学食かあ、などと呑気に立ち上がった俺はいきなり目の前の少女に頭を下げられた。

えーっと、かわいい子だな。

いや、そうじゃないだろ!!

今この子はなんて言った!?

魔法を教える!?!なんで!?

そもそも誰!?

このクラスじゃないよね!?

その前になんで俺!?

噴水のごとく沸いてくる疑問に混乱していると、目の前の少女が顔を上げる。

鮮やかな青色の長髪、女性として平均的な慎重に端正な顔立ち。その瞳は真剣に俺を見つめていた。

「あ、申し遅れました。第11高校一年B組の早川綾芽はやかわ あやめと言います」

ほう、お隣さんか（悠希たちはC組）。などと思当はずれなけとを思ってしまったのは混乱しているからだ。そうだと願いたい。

「えっと、じゃあ早川さん」

「綾芽でいいですよ」

なんだかペースを掴みにくいな、この子。

「じゃあ、綾芽さん。取り敢えずなんで俺に？」

まず当たり触りの無いところ攻めていこう。うん、それがいい。

「はいっ！華瀬さんが学年6位の波風さんにあっさり勝ったと、友達に聞いたので」

「うん、その友達連れてこようか。でないと俺が殺される」

後ろからとてつもない殺気を感じるんですが、まさか紅葉さんじゃありませんよね？怖いから確認しないけど。

冷や汗がだらだら流れてくる俺の心情などつゆ知らず、話を続ける綾芽さん。

「それに華瀬さんって、英雄の『華瀬悠希』と同姓同名じゃないですか、そんな人に教えて貰うなんてちょっといいかな、って」

ビクウツ！！

いきなり笑顔でそんな爆弾を投下してきた。

心臓が飛び出すかと思う程の衝撃に、俺と紅葉は引きつった笑みを浮かべる。

「はははははー、同姓同名ってただだよー。そんなことないってー」

「そ、そうよ。あははははー」

俺も紅葉もこの際若干カタコトなのは仕方がない。

俺たちは今爆弾処理の最中なのだからそんなことに変わってなどいられるかつ。

ひとまず念話で作戦会議。

『まずくない？』

『非常にまずいな』

『どうする？』

『どうしようか』

やばい何も決まらない。

焦る俺たち。

そんな中、案外直ぐにことはすんだ。

「まあ、そうですねー。でも華瀬さんに教えて貰いたいっての冗談なんかじゃ無いんですよ？」

き、きたあー！！！！これだー！！！！

「う、うん。まあいいよ」

それぐらいでこの話がスルーされるなら安いものだ。

「本当ですか！？ありがとうございますっ！！」

「いやいや、こちらこそありがとうございます」

逸らされてくれて。

俺の最後の言葉に首を傾げる綾芽さんだったが、直ぐにそんなこと忘れて上機嫌で教室を出て行った。

「・・・・・・これが日本でいう嵐が過ぎたってやつか？」

「ああ、そんなとこだ」

ぐったりとうなだれる俺と紅葉。

訝しく見つめてくるライラだったが、すぐに興味を逸らして時計を見る。それに俺たちもつられる。

桜も待たせてることだし昼飯行かねーとな。

放課後。

俺はアリーナへ来ていた。もちろん綾芽さんの特訓のためである。トーナメントの近いこの時期はアリーナが一般開放されているため

生徒たちも自由に使える。既にアリーナにはチラホラ人影があり、皆技や魔法を磨くために努力を積み重ねている。

いいねー、若いって。

年寄りくさい思考を振り払い、待ち合わせの人物を待つ。

・・・遅いつ!!!

HRが終わってももう1時間は立っているはずだ。長引いたとしても大分前についても可笑しくないはずだ。

迷った？いやまさか！。

「すみませーん!!」

そんなことを思っていると、目的の人物が現れた。

「待ちました？」

「うん、すごく」

ドラマみたいに「いや、今来たところ」なんて言う筈もない。そんな俺の態度にしきりに頭を下げる綾芽さん。

「す、すみませんっ！！その、迷ってしまっ」

「……………まじで？」

先ほどのバカみたいな予想がなんと当たってしまっていた賞金とか貰えないかな？

「いや、頭上げて。そろそろ始めないと日が暮れるから」

「は、はい！！すみませんっ！！」

いや、だから……………まあいいか。

俺の言葉にもう一度深く深く頭を下げ、目を瞑る。

「ジエネレート」

綾芽さんが呟くと手に光が集まる。実戦では目を瞑っての武装展開なんてできないが、学校の模擬戦なんかでは展開まで相手が待つてくれるので、集中しやすくするために目を瞑って行う人も少なくない。

やがて光が散り、彼女の手に一メートルほどの杖が現れた。

「特化型ねー」

魔力保有量が多い魔術師などに良く使われる魔法オンリーの補助武装だ。

なるほど、と頷いていた俺だったが、次の瞬間には啞然とさせられた。

「おいで、クウ」

彼女が呟くと今度は空中に魔法陣が浮かび上がる。
その中から水色の少女の妖精が現れたのだ。

「せ、精霊術師っ!?」

さっきの魔法陣。あれは召還術師や精霊術師が魔獣、精霊を呼び出すために展開する物だ。別にそこまで珍しいものではない。だが問題があった。

「なんで俺に教えてもらおうと思ったんだっけ？」

「え？友達が華瀬さんの魔法がすごいって言ってたからですけど？」

はあ、この子はほんとに確信犯なんだか天然なんだか。

「確認のために聞くけど、魔術師と精霊術師だと魔法の発動の仕方が違うって知ってる？」

「え!? そうなんですか!？」

やっぱりか……………。

「いいか？魔術師は自分の魔力を補助武装に組み込まれた術式に流し込んで発動させるのに対して、精霊魔法は魔力を補助武装に流し込んで術式を展開、そして精霊が補助武装に魔力を流し込んで発動するという手順が必要なんだよ。精霊と同じ属性のしか使えないけど、その分精霊魔法は少量の魔力でも威力が強いつてわけだ」

「そ、そうだったんですか……」

なんでそんなことも知らないのだろう。こんなの学園都市の小学校で教えられただろうに。

「その、私勉強苦手で。成績もいつも下の方で」

そんな俺の疑問を察したのか、苦笑いをしながら言ってくる。上目遣いが妙にかわいらしい。

「……まあいいか。そのかわり役にたつかわからないぞ」
「はいっ！お願いしますっ！」

満面の笑顔を向けてくる綾芽さんに毒気を抜かれた俺は、これから彼女に魔法を教えることになってしまった。

この日はアリーナが閉まるギリギリの時間まで行われたのだった。

トーナメントまで後三日。

episode 11 コーチ（後書き）

感想お待ちします。

episode 12 英雄の肩書き

“英雄”

その肩書きは嫌いだった。

ただ怒りに身を任せて殺戮の限りを繰り返していただけなのに、後々そんな風に呼ばれ出した。

呼ばれる度に「人殺し」と罵倒されている気がしてならない。事実向こうの国ではそう呼ばれているだろう。

別にそのことに後悔しているわけではない。

ただそう感じるというだけだ。

だからその肩書きが“英雄”から“犯罪者”に変わったところで何も感じない。

だがなんだろうこのやり場の無い気持ちは。

矛盾している。

何も感じないはずなのに苛立ちを隠せないでいる。

そんな自分がただやるせなくて、情けなくて。

俺はただ心の中で叫び続けることしかできなかった。

7月18日木曜日。

今日も暑い中蟻たち（俺たち）はせっせと巣穴（教室）に餌（教材）

を運んでいた。
なぜこうなったのか改めて振り返ることにしよう。

数分前。

「あら、いいところに」

そんなミレア先生の第一声には嫌な予感しかなかった。

「どうしたんすか、先生？」

おい、ばかやろう。

この選択肢は黙って通り過ぎるしかないだろうっ
いやだよ、絶対嫌なことしかおこらないよ、今死刑宣告待つ囚人の
気持ちだよ。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど」
そらきたぞ。

「もちろん慎んでおう——」
「辞退させて頂きます」

何か勝手に承諾しそうになったバカがいたので変わりに断っておい

た。

「何言つてんだ！？ミレア先生の頼みだぞ！？」

「お前こそ考えて見ろっ！！相手はあのミレア先生だぞ！？」

睨み合う俺たち二人。

やがてどちらからでもなく――。

「「じゃんけん――」」

「なんであの時に俺はパーを……」

自分の手が恨めしい。

そんな出来事があり、現在教材室から次の魔術学の授業に使う教材を運びに行くところだ。

教材室は校舎の隣に位置するため、屋外を通らなければならないのだ。

「なんでここだけ校舎と別なんだよ」

「魔法に使う教材なんて幾らでもあるからな。量てきに校舎内だと

入りきらないんだと、ほっ」

頼まれた教材を抱え、俺たちは来た道に戻る。

「なー、これ終わったらジューズ奢って。てか奢れハゲ」

「なんで俺が奢んなきゃなんたいんだっ！？てかハゲてねーよ！！」

「え？気づいてないの？頭頂部の頭皮が若干……」

「マジで！？やばい！！どうしよう！？」

「正常なままだった」

「悠希っ！！！」

しょーもないことで笑い合い、道も半ばまできた。

もう少しで着く。

そんなことを思っていると突如耳元で誰かが囁いた。

ゾクッ！！

ゾツとするような冷たい声、背筋に途轍もない寒気を感じ、反射的に振り向く。

だが、そこには何もない道がただ延びているだけだった。

気のせいかな？

いや、そんなはずはない。

あの背筋に走った戦慄は本物だったはずだ。

ならば十中八九、死霊術師の“ネクロマンサー隠蔽”ハイドの魔法だろう。

だが問題は普通の死霊術師の“隠蔽”で俺が気づかないはずがないということだ。

「ん？どうした悠希？」

「……なんでもない」

訝しげな顔で俺の顔を覗き込むライラにそう答え、再び歩みを進める。

あの凍るような冷たい声音。どこかで聞いたことがある。

この都市の住民、もしくはここに侵入でき、俺の背後を取れるほどの実力者で、なおかつ幻術などに長けている死霊術師。

（あいつ……いや、そんなはず……）

頭を振り、その考え否定しようとする。だが、頭の中にへばりついたまま中々消えてはくれない。

さっきのあの言葉が心の中に居座り続け、心に暗い影を落とす。

とりあえず手に持った教材を教室に運ぶ当初の目的を遂行するために足を動かす。

——背後に気をつけてください。

未だに耳に残るその言葉と冷たさから逃げるように俺その場を後にした。

5 限目、死霊学。

この時間は死霊術師の特徴などについての授業だ。

死霊学講師のデミス・クリア先生が、仏頂面のまま教科書を読み上げている。

普段なら寝て過ごすのだが、今の俺には死霊術師は特別な意味合いを持つ。

「死霊術師は自身の姿を隠した隠密行動を得意とする術師だ。幻術で身を隠し、ある時は魔法、ある時は武器で、またある時は使い魔で相手に襲いかかる」

普通の術師にも魔獣を手懐けて使い魔とするものはいる。ただ、召還術師と違うところはそれ自体で戦うか、あくまでサポートをさせるか、それに使い魔の数などもある。使い魔を手懐けるにはそれなりのセンスと知識がいる。そのため召還術師の使い魔の数の平均は15.3、それに対して他の術師は0.4。この統計から見てもわかる通り他の術師だと極端に少ない。

そんな中でも死霊術師の中では使い魔を所持しているものは多い。理由としては自分の身代わり、もしくはさっき先生が言ったように

死角からの先生攻撃などが挙げられる。

「もう一つ彼らには特殊な魔法がある。それが“傀儡”^{くぐつ}だ。無系統魔法に属するこの魔法は、ある程度の質量の物体を自由に動かせる。死霊術師が戦場でこそ、その真価を発揮できるのは動かせる物、要は死体が沢山あるからだ」

そのことを聞いた生徒はみな顰めつ面をしだす。女子の中では顔を青白くさせている人もちらほら。

無系統魔法、または解析不能の能力。
インヒジフル・アビリティ

解析不能の名前の通り、現代の科学では解明できない魔法のことだ。その人が生まれたときから潜在的に持っている固有魔法や、伝説武器の特殊性についてもこれが言える。

その中でも“傀儡”は固有魔法に含まれる魔法だ。

そんなことは実戦でなんども見てきたことだし、普段ならこの授業も退屈だと感じるのだが、今朝のことが未だに頭から離れずについて聞き入ってしまった。

我ながらどうかしてる。

内心で苦笑しながら意識を思考に落とす。

今朝のあいつ死霊術師だった、それは間違いない。
だが普通の学生でも無いだろう。でなければ気づかないはずがない。

俺の頭の中では半ば誰なのか結論がでている。

だがまだ確証がない。

だがもしあいつならなんの目的も無しに俺に接触する筈がない。

じゃあなんの用で？

俺が犯罪をおこしたからか？

でもそれだけでわざわざあいつが出向く玉か？

頭がオーバーヒートしそうな程の疑問を処理していると、ふとある考えが頭をよぎった。

わからないなら直接本人に聞き出せばいい。

そんな元も子もないことなのだが、なんとなくあいつがいそうな場所に心当たりがあった。

取り敢えず頭の中で予定を組み立てる。

そうこうしている内に授業が終わりへと近づいていった。

前ではライラがいびきをかきながら爆睡。
隣ではせつせと鉛筆を動かしている紅葉。
そんな二人をぼんやり眺めながら授業が終わるのを今か今かと待つ
ていた。

e p i s o d e 1 2 英雄の肩書き（後書き）

感想よろしくお願いします。

episode 13 死神との約束

「2日間ありがとうございましたっ!!」

目の前で深々と頭を下げる綾芽さんに、どうしたものかと苦笑いしながら考える俺。

今は7時半少し前。

今日も彼女の指導をして、アリーナの閉館時間ギリギリに切り上げて寮へ帰っているところである。

明日はアリーナが整備で使えないため、明日の特訓も無くなり、自動的に今日までとなったのだ。

「そんなに畏まらなくなったっていいって。たった2日間しか教えられなかったし、俺も精霊魔法を直に見られて参考になってるから」

思ってもいないことを口にした。

精霊魔法を参考にどうかいうレベルはとくに卒業しているし、他国の軍隊と合同で任務に当たっていたこともあって熟練した精霊術師を目の当たりにしたこともあるので今更参考にはならない。

「そうなんですか。それなら良かったです!」

満面の笑顔を向けてくる彼女に心が痛む。

纏わりつく罪悪感に気付かれないよう俺も笑顔を向ける。

「それじゃ俺こっちだから」

「え？寮はこつちですよ？」

首を傾げる綾芽さん。

「ああ、ちよつと用があるから」

「そうなんですか？なら門限に遅れないようにしてくださいね。寮長の説教がこれまた長いんです」

忠告してくれる彼女に「努力する」と手を振り寮とは別の方向へ向かう。

「……ジエネレート」

彼女が見えなくなったところで呟く。手首に光が纏わりつき、ブレスレット型の補助武装が現れた。

特化型だ。

補助武装を複数持つやつは少数ながらいると前に話したと思うが、俺はその中でも一際多い。

マジック・トレース
瞬間展開なんていうチートな技を使えるのでタイムラグ無しに武器を持ち替えられるからだ。

だが特化型と武器型を同時に使いこなせるやつは極稀だ。

理由は三つある。

一つは魔法を並立発動出来る者が少ないということ。
簡単に言つと魔法を発動させる手順を同時に複数も出来る人間は限

られているということだ。

二つ目は補助武装はその構造上常に魔力が流れる仕組みになっていること。

特化型と武器型では構造が異なるため、流す魔力も別々に流さなくてはならない。

最後は魔力の消費が凄まじい割に発動するまでの時間が長いということ。

当然のことながら一つのコップに水を入れるのと2つのコップに同時に水を入れるのでは2つの方が量も時間もかかる。

魔力もそのことが言えるわけだ。

だから特化型と武器型2つを持つ奴はほとんどいない。

俺はその三つ全て問題無く使えるので、大丈夫なのだが。

魔力を流し込み、術式を展開。

魔法が発動し、俺の周りを風が覆う。突如足が地面から離れ、俺の体上昇していった。

風属性の“浮遊”という魔法だ。

これまた魔力消費が激しい高等魔法を使って移動することにしたのだ。

俺はそのまま歩いてきた方向とは反対——つまり学校へと向かった。

流石に薄暗い空に点のように浮かぶ俺に気づくやつなどいないだろうと思った矢先に不穏な視線を感じた。

「……ビンゴ」

学校まで残り1kmぐらいの距離でこの射抜くような視線を感じるということは、俺の予想が的中していることを伝えていた。

屋上にゆっくり着地すると、そいつは突然現れた。いや、元からいたのだろうが“^{ハイド}隠蔽”の魔法を使っていたのだ。

目に映るのはプラチナブロンドの髪を短く切った俺と同じ歳なのだが、そうは思えない小柄な美少女だった。だが、その少女の顔はおおよそ感情というものが抜け落ちたように感じるほど無表情なものだった。

そんな中金色の瞳だけが俺を射るような視線を投げかけてくる。

「お久しぶりです“テュラン”さん。よくここがわかりましたね」「やっぱり“トート”だったか。別に、ただの感だよ」

“死神”^{トート}の2つ名を持つ彼女はニコラ・ベール。俺がドイツ軍との合同任務で出会ったドイツ軍所属の死霊術師^{ネクロマンサー}だ。（ちなみに“テュラン”ってのはドイツ語で暴君って意味なんだとか。つけたやつに抗議したい）

「それで、どうしてここに来たんだ？」

改めての問い。だが予想通りの答えが返ってきた。

「あなたを抹殺するように命令を受けました」

「あー……やっぱりか」

予想していたとはいえ実際に口にされると結構辛いな。頭をガシガシ搔いていると、ある疑問が沸いてきた。

「じゃあなんであの時殺らなかったんだ？あの時以外でも殺す機会なんていくらでもあっただろ？」

あの時とは今朝の教材を運んでいたときのことだ。思えばあの時以外にも隙なんていくらでもあったはずだ。当然の疑問に、しかし全く別の答えが返ってきた。

「私も明日からこの高校に転入することになりました。既に書類は提出しています」

「はい？」

抑揚の無い声でそう言うニコルに対してわけがわからず混乱する俺。そんなことなどお構いなしに彼女は続ける。

「明後日のトーナメントには出場できるそうです」
「は？」

全く意味の解らない言葉を紡ぎ出すニコラの顔から思考を読もうとするが、無表情の彼女からそんなことは無駄とすぐに諦めた。
首を傾げる俺に、彼女は更に意味の解らないことを言い出した。

「そこで私と戦ってください」
「……………は？」

さつきから「は？」しか言っていないな、俺。

いやいや待て待て！！
何考えてんだよこいつ。

全く表情を動かさないこいつに探り合いで勝てるはずもなく、取り
敢えず思いついたことを問う。

「……………えーつと……………なんで？」
「あなたには前に一度負けましたから」
「は？」

あれ？俺、こいつとやり合ったことあったっけ？
いくら記憶を辿っても思え出せない。そんな俺を見て察したのかニ
コラが続ける。

「第六次世界大戦の時です」
「……………」

その言葉に顔をしかてしまう。

忘れていたのに忘れられない単語。

俺の心に穴を空けた出来事。

俺が英雄なんて欲しくもない栄光を得た戦い。

七年前。

当時最強の軍事国家であるロシアが中国に侵攻したことが引き金となり、世界中を巻き込んだ大戦争。

およそ二年間で一旦休戦になり、今現在も冷戦状態が続いている。

頭の中でズキズキ痛む何かを抑えながら、言葉を紡ぎ出す。

「お前も“あれ”に参加してたのか？まだ10年ってなかったろ？」

「あなたにだけは言われたくありません」

即座に無表情で言い返してきたニコラに思わず苦笑いを浮かべる。
だが、それでもおかしい。

「あの時はヨーロッパと極東、あとアメリカは軍事同盟を結んでいたはずだ。ドイツもその中に含まれていたはずだろ？」

強大な戦力を誇るロシアに対抗するためにすぐさま各国が軍事同盟を結んだ。

それでも今は休戦状態に持ち込んだだけなのだ。

首を傾げる俺に、ニコラはコクリと頷く。

「そうです。私は実際にはあなたとは戦っていません」

「どういうことだ？」

わけがわからん。

こいつは何が言いたいんだ？

もう今日何個目かの疑問符を浮かべていると、急にニコラが押し黙った。

重苦しい沈黙が数瞬流れたが、彼女は口を開いた。

「あなたは私の獲物を横から奪い取りました」

……………あれ？そんなことあったっけ？

「私は当時には伝説武器を所持していましたが、そんなときに初めて伝説武器所持者と戦いました。ですが苦戦してしまっていたところをあなたが乱入してきて一瞬で終わらせてしまったんです」

……………あ。

「……………もしかして弓使いの女か？」

コクリと頷くニコラ。

あー、思い出した。

確か開戦から一年ぐらい経ったときだっただろうか。

まだそのときは暴走していなかった頃なのでよく覚えている。

だが、あの時は――。

「……………女の子が襲われてると思ってたぞ」

あんなところに子供がいたら普通逃げ遅れたって思うだろ。

俺もなんとか間違えられてその度に居心地の悪い思いをしたものだ。

そんな感慨に捕らわれていると、ようやく話が見えてきた。

「つまりあの時自分が倒せなかった相手を俺が倒したのが悔しいと？」

コクリ。

再び頷いた。

こいつ見かけによらず負けず嫌いなんだな、きつと。
けどなあ。

「なんでわざわざトーナメントなんだ？」

当然の疑問。だが、

「他のところだと狭すぎます」

「あーなるほど」

こんなところでレア持ち二人がやり合ったらとんでもない大惨事になりかねない。

でも俺に何のメリットがある？

「あなたが私に勝った場合、軍には私から命令の中止を要求します。
もし拒否されても私が軍を辞めればすむ話です」

「は！？」

何をいきなり言い出すんだこいつは。

俺の心情を察したのだろうニコラがそんなことを言い出した。
俺としては嬉しいのだが。

「……お前はそれでいいのか？」

「はい。これは私の意志です。それに私は他の保持者たちと同じように祖国への執着はありませんので」

即答でそう言い切るニコラ。

伝説武器所持者はどういうわけか自国への執着心が薄い。もちろんそうじゃないやつもいるが、基本的に保持者たちは自分の欲求を優先させるのだ。

「そうか、なら俺も遠慮せずに済むな」

「伝説武器を使いたくないなら使わなくてもいいです。勝てる自信があればですけど」

うつ、読まれてる。

こいつもしかして精神干渉の固有魔法でももっているのではなからうか。もしそうなら今世紀二人目の発言者だな。

「では私はこれで。また明日お会いしましょう“テュラン”さん」
「ああ」

突如彼女の身体が霞む。

“隠蔽”の魔法を使ったのだろっ。
そこで俺はあることに気づいた。

「これからは“テュラン”は止める。恥ずかしい」

「ではなんと？」

「好きに呼んでいい」

もうすでに彼女の姿は見えなくなってしまったが、顎に手を当てて悩

んでいるのがわかった。

「では悠希さん、と。私のこともニコルで構いません」
「わかった」

“ニコル”という愛称で呼ぶことを認めてくれたって事は少しは距離が縮まったかな？

気配も感じられなくなった彼女にそんなことを思い、少し嬉しくも感じた。

このときには門限を過ぎていることにまったく気づいてなかったのだった。

トーナメントまで後2日。

episode 14 心の弱さ

「ニコラ・ベールです。よろしく願いします」

抑揚の無い声で無表情な美少女がそう言うと、クラス中が沸いた。盛り上がるクラスメートとは裏腹に、俺は顎が机につくかというぐらい口を開けて呆然としていた。

俺の前と左、つまりライラと紅葉が首を傾げながら俺を見ている。

何が起こったかと言うと、ニコルが転入してきたのだ。しかも俺のクラスに。

ふと昨夜の彼女の言葉が頭をよぎる。

『また明日お会いしましょう』

……………。

あいつ知ってやがったなっ！！！！

せめて心の準備ぐらいさせてほしい。

恨めしく睨みつけると、クラスメートの熱狂（男子女子両方）を受けながらも無表情のニコルは唐突に俺へと目を向けた。視線と視線が交わる。

「先生。あそこの席に座ってもよろしいでしょうか？」

ニコルが指差したのは俺の後ろ。

クラス中が静まり返り、俺を凝視する。

だが口を開けて呆然としている俺の意識には入らない。

「はい、いいですよ」

絶対面白がっているミレア先生が頷くと、スタスタとこっちに向かってくる。すると彼女は俺で足を止めた。

「おはようございます悠希さん。昨晚からまだそんなに経っていませんが、今日も1日よろしくおねがいします」

そう言つてぺこりと頭を下げる。

ニコルのこの発言でクラス中から悲鳴なんだか歓喜なんだかよくわからない叫びが上がった。

いきなり何言い出すんだこいつはっ!?

「ゆづき……」

「……ゆづ、昨晚何があつたの?」

「違う!! 激しく誤解している!!!!」

ライラと紅葉が俺を疑わしげな視線で見つめてくる。

本当に違うんだーっ!!!!

それから誤解を解くのに1限目の魔術学を丸々使ってしまった。

元凶であるニコルは無表情のまま首を傾げるだけなのだから余計な
ちが悪い。

明日はトーナメントのため、授業は午前中だけとなった。今日は整備のためアリーナも使えず、特訓もできないので俺の部屋はライラ、紅葉、桜、綾芽さん、ニコルの6人が集まって少々狭く感じてしまう。

「なんで俺の部屋に集まるんだろう？」

「さあ？」

俺の素朴な疑問に曖昧に答えたのはライラだ。

「男の子の部屋に入るのって初めてだから緊張しますう」

「ここが悠希さんの部屋なのですね。綺麗に整理整頓されています」

初めて来た二人（前者が綾芽さんで後者がニコル）は物珍しげに辺りを見回す。

「お兄ちゃんって昔から几帳面だもんね」

ニコルの言葉に桜が頷く。

「別に几帳面ってわけじゃない。ただ汚いと落ち着かないだけだ」

「世間一般ではそれを几帳面と言います」

ニコルの厳しいツツコミ。

心なしかいつもより表情が和らいでいるような……いやわかんね。

それからくだらないことなどで盛り上がっていると、ライラが思い出したように口を開いた。

「そういえばさ、ニコラちゃんはトーナメントに出られんのか？」

「あー、そうね。なんてったってトーナメントの1日前だし」

それに紅葉も便乗する。もっともな意見だがニコルは首を縦に振った。

「ミレア先生に聞いたところ、トーナメント表に組み込んでいただけるようです」

「そうなんですか。がんばってくださいね、ニコラさん」

笑顔で応援する桜にコクリと頷くニコル。

『で、この子はどっいった知り合いなの？』

突然頭に紅葉の声が響いてくる。念話だ。

『だからそんな関係じゃ——』

『そうじゃなくて』

俺の言葉を遮り、真剣身を帯びた声色が頭に響く。

『……なんのことだ？』

『とぼけないで』

誤魔化そうと試みるも、直ぐにバレてしまった。幾分か声の温度が低くなったのは気のせいではあるまい。

『弱ったねー……』

どこから話した物か。

『えつとな——』

『ただの戦友です』

観念して答えようと思った矢先、別の声が割り込んできた。驚いて辺りを見回すと、ニコルがジーっとこちらを見ていた。

『ね、念意同調！？』

隣ではこちらも驚いた紅葉が目を見開いていた。

念意同調というのは、念意による通信を傍受、または妨害するための魔法だ。

だが傍受する回線に割り込むために脳波をその回線に合わせなければならぬため、かなり難しい高等魔法に値する。

『に、ニコル……。脅かさないでくれ』

『こそそと人の秘密を話すのは感心しませんね』

『すみません……』

絶対零度の声に俺たちは消え入りそうな音量で声を飛ばした。

『先程も話した通り、私と悠希さんはただの戦友です。一年前、悠希さんはドイツ軍と合同任務を受け、私はそこで知り合いました』

六年前の出会いは意図的に避けてくれたのだろう。無表情ではあるが人の嫌がることを言わない彼女に内心で感謝を述べる。

それで満足したのか、紅葉は「そ、そういうこと」と半ば逃げるように念話を切った。

今、回線に入っているのは俺とニコルだけ。

だが、妙に重苦しい沈黙がながれていた。

『ここにいる方々はみな知っているのですか？』

沈黙を破ったのはニコルだった。知っているとは俺の秘密のことだろう。

彼女の問いに他のみんなには気付かれないように小さく首を振った。

『……いや、紅葉だけだ』

『そうですか』

それだけ言い残し、ニコルも念話を切る。

さっきの話の意図はなんだったのだろうか？

ただの確認のための言葉だったのかもしれない。
もしかしたら違つかもしれない。

紅葉とニコルの声が聞こえなくなった頭の中は妙に静かに感じた。

トゥルルル

ライラたちが帰ったのを見計らってシャワーを浴び、髪を拭いている所でケータイが鳴った。

ディスプレイに表示されているのは『波風一葉』の文字。

時刻を確認する。

今は夜の8時半。

こんな時間に呼び出しだったらどうしたものかと冷や冷やしながら通話ボタンを押した。

「もしもし」

『あ、悠希？今ちよつといいかしら？』

案の定電話越しから一葉の優しい声が響いてきた。

「ああ、できれば外出はやめてほしい」

『安心なさい。今日は電話で済みますから』

その言葉を聞いた瞬間内心で安堵する。だが、続けられた言葉は安堵とは程遠かった。

『あんたの濡れ衣の件だけど、やっぱり少し可笑しなところがあるのよね』

「おい……」

『違法なことはやってないから問題ナッシング』

真面目な話もこいつが話すと緊張感なくなるな、このやろつ。
俺の考えを即座に否定して言葉を続ける。

『魔力の痕跡が見つからなかったみたいなのよね、見つかったのは殺された術師の物だけ。普通なら武装展開しただけで痕跡は残るはずなんだけどねー。一つを除いて』

「……伝説武器保持者が絡んでるって？」

普通の補助武装は展開の際に魔力を撒き散らすように具現化させる。だが伝説武器は魔力を発散させずに具現化するのだが、未だにどういうメカニズムで具現化されるのはわかっていない。
俺の推測を肯定するように一葉は話を続ける。

『そう。で、被害者の傷口から推測すると武器は刀じゃなくて剣なんだって。刃渡りはどれくらいかわからないけど』

「日本が保持している伝説武器の中で剣は二つ。俺の“ファランクス”と“デュランダル”だけ、ってことか」

伝説武器、それも剣の類となればある程度は絞り込める。

アメリカの“エクスカリバー”に“テストロス”、イギリスの“メルフェス”、中国の“スサノオ”そして――。

「――ッ！――ロシアの“ガラドボルグ”！――」

『そう、私は全部ロシアの自作自演だと思う』

その瞬間“やつ”の歪んだ笑みを思い出してしまう。それと同時に吐き気がこみ上げてきた。

悲しみ、怒り、恨み、憎悪、様々な負の感情に押しつぶされそうな胃を抑え、なんとか耐える。

『……大丈夫？』

ようやく落ち着いたところに一葉の心配気な声が響いてきた。

「ああ、悪い。でもやつが関わってるなら、もう一葉は心配しなくていい」

『なんでもかんでも一人で背負い込むのは悪い癖』

一葉の真剣な声に思わず苦笑を漏らす。

「そうだったな」

『わかればいいの。それじゃおやすみ。明日はがんばってね』

「ああ」

電話を切ると、堪えきれなくなった吐き気と共にそのまま洗面所に駆け込む。

「うっ」

我慢しきれず胃の中の物を吐き出す。何度も何度も。

「はあはあ……くそっ！！！」

あいつを思い出ただけで嘔吐する自分の弱さに反吐がでる。

擦り切れるような痛みをあげる胃を俺は思いっきり殴りつけた。

「っっっ！」

痛みで床にうずくまってしまふ。

そんな自分にうんざりしながら瞼を閉じた。

こんなんでニコルに勝てるのか？

頭をよぎるそんな疑問も、今はどうでもよく感じてしまふ。

俺はそのまま意識を手放した。

episode 15 沈みかける意識

ドンドン。

ドアを叩く音で俺は目を覚ました。

ドンドン。

喧しい音が部屋を包む。

「おい悠希、早く起きろ」

「ゆうー、集合に遅れるよー」

この声はライラと紅葉か。

今何時だろう？

時間を確かめたいが、身体がすごくだるい。

「お兄ちゃん？早くー」

「悠希さーん。私たちまで遅刻しちゃいますう」

桜と綾芽さんが催促する。

「ゆう？入るわよ？」

ガチャリと扉が開く音がした。それと同時に4人分の足音がこちらへ向かってくる。

一人足りない気がしたが、それはニコルの物だろう。

「——ッ！？おい、どうした悠希っ！？」

角に差し掛かったところで俺が床に倒れていることに気が付いたのだろう。4人が駆け寄ってくる。すると綾芽さんが俺の額に手をやった。ひんやりとされていて気持ちいい。

「す、すごい熱ですよ！？」

彼女の言葉に全員の顔色が青くなる。だが今はそんなことどうでもいい。

「……ライラ、今何時だ？」

「まさか出るつもりなのか！？やめとけて！！」

「何時かって聞いてんだよ」

「ッ！！」

幾分凄みを聞かせた声を投げかける。そんな俺に吞まれたのか、ライラはポツリと呟いた。

「……7時57分だ」

「開会式は？」

「……………8時半」

それだけ聞き出すとヨロヨロと立ち上がる。

「ちょっとお兄ちゃん！？そんなふらふらなのに本当に出場するの！？」

心配気に見つめてくる桜。見ると他のみんなも同じ様な視線を投げかけていた。

無理矢理笑顔を作り、桜の頭にポンつと手を乗せる。

「心配しなくても大丈夫だって。そのうち治る。ちょっと準備に手間取るから先に行っててくれ。確か集合はうちの高校のアリーナだったよな？」

「あ、ああ……」

それでも動く気配の無いみんなに、どうしたものかと重たい頭で考えようとすると、紅葉が先に口を開いた。

「行きましょう。ここに居てもゆうが気を使うだけだもの」

「……わかった」

そう言うとなんぞ部屋を出て行く。

最後に部屋を出て行くとする紅葉が、ふと足を止めた。

「……絶対来なきゃ許さないから」

「俺が嘘付いたことなんかあったか？」

「……………バカ」

最後に軽口を言うと、紅葉が何か言ったような気がした。だが考えるよりもぐらつきかける身体を支えなければならなくなり、そんな暇も無かった。

体内に魔力を循環させ、筋肉の代わりに魔力で身体を動かす。自分を一つの機械として扱うイメージだ。

俺はその状態でクローゼットにある制服に着替え始めた。

寮を出たときには既に開会式まで15分を切っていた。走らないと間に合わないだろう。だが、

「ジェネレート」

ブレスレット型の特化型補助武装を呼び出し、魔力を流し込んで、術式を発動させる。

この前と同じ“浮遊”の魔法を使って俺はアリーナへ一直線に飛んでいった。

およそ五分で到着し、近くの茂みに着地する。

もう何をするにしても億劫だ。だがこんなことで諦めていたら一生あの男に屈するような気がしてしまう。

それだけは絶対ごめんだ。

ふらつく身体に鞭を打って、アリーナの中へ入っていく。

中には第11高校の一年生だけで埋め尽くされていた。
これの26倍の生徒数か。
そりゃすごい。

取りあえずCクラスの場所を探す。今日は常に行くことになった身体強化で視力を上げる。辺りを見回すとすぐに紅葉たちを見つけることができた。

「すまん、遅れた」

うまく回ろうとしない舌までも魔力で動かす。もう自分の意志なのか魔力が意志になったのかよくわからなくなってきた。

「……本当に大丈夫なのか？」

「闘ってりや忘れられる」

未だに心配そうな視線を投げかけるライラに苦笑する。
すると、ある異変に気が付いた。

「ニコルはどうした？」

彼女の姿が見当たらないのだ。訝しく思って問うと、紅葉が答えた。

「さっきまで居ただけだね。先生に言ってどっか別のところに行っちゃったみたい」

「へー……」

正直ありがたかった。

今の俺の姿を見たら彼女は失望してしまうだろうな。そんな感慨に浸っているとついに開会式が始まった。

その時のことは、正直良く覚えていない。

開会式が終わったのか、気が付いたら俺は歩いていた。

ケータイを開く。

俺の最初の試合はどうやら15分後、つまり一番最初の第一試合のようだ。

場所は第6高校の第2アリーナ。

意識が無かった割にしっかりしていたらしい。

ゲートがある方角にきちんと向かっていた。

「転移、第6高校」

ゲートに付き、俺は呟く。

すると沢山の光に包まれ、次の瞬間には別の場所に立っていた。

眼前には第11高校とあまり変わらない馬鹿でかい校舎が広がっていた。

ここが第6高校か、あんまりデザインは変わらないんだな。

そんな感慨に浸りながら足を進めるが、ある疑問が過ぎる。

第2アリーナってどこ？

なにぶん初めて参加するもんだから他校のどこにアリーナがあるかなんてわからない。

取り敢えず誰かに聞こうと思い、周りを見回す。するとお喋りをしている女子生徒三人を見つけた。この子たちに聞くことにしよう。

「ちょっといいかな？」

「え？は、はいっ!？」

いきなり硬直し出す彼女たち。だがこっちとしてもあまり構ってられない余裕はない。

「第2アリーナってどこか教えてくれない？」

「は、はい!!えっと、そこを真っ直ぐ行っ……」

道を指で指しながら何故かたどしく説明しだす黒髪の少女A。
だが、

「……………ごめんさっぱり」

さっぱりわからない。

そんな俺をクスツと笑う茶髪のおっとりした少女B。

「よ、よろしければご案内しま、致しましょうか？」

何故かすごく仰々しく提案してくる金髪の少女C。

「ああ、助かる」

俺が頷くと、ガッツポーズやハイタッチを交わし出す彼女たち。訝しげに首を傾げる。

「どうかしたのか？」

「……いえっ……」

「凄く息びったりだな」

まったくズレの無い反応。俺の素直な感想にえへへ、と照れる少女B。

「そろそろ時間無いし……いいかな？」

「……ごめんなさいっ」

と、少女C。

「あ、あの……私、春日野遥かすがのはるかっていいいます……!!」

少し歩くと少女A——もといい春日野さんが少々テンパリながら名乗ってきた。

少し驚いていると、意図はわからないが同様に他の二人も便乗した

す。

「私は水谷里香^{みずたに りか}だよ。私たち三人はこの生徒なの。よろしくねえ」

「せ、セシリー・ビーンですっ！！よろ、じゃなかった！！ふつつか者ですがよろしくお願い致しますっ！！！」

少女Bこと水谷さんと、少女Cことビーンさんも自己紹介していった。

正直俺は今凄く喋りたくない状態なのだが、女の子に名乗らせといて自分だけ名乗らないのは寝覚めが悪いだろう。

「第11高校の華瀬悠希。よろしくな」

「……え、え……っ！？！？」

え、何？なんか変なこと言ったっけ？

いきなり驚きだした彼女たちに若干後ずさると、春日野さんが目を爛々と輝かせて詰め寄ってきた。

「も、もしかして波風さんを倒したっていう最近話題の転校生さんですかっ！？」

た、他校にまで伝わってんの！？

広めたやつ出てこい。今は無理だけどミンチにしてやる。

そんな風に質問責めを受けながら歩いていくと第2アリーナに到着した。

「で、ではゆっきーさんまた」

「またねえゆつきいー。観客席で応援してるからねえ」
「が、がんばってくださいませゆつきー様」

珍妙なニツクネームで呼びながら手を振ってくる三人。この短時間でいつのまにか愛称で呼び合う仲になっていた。別にいいんだが。

さつき観客席で応援すると水谷さんが言ったが、そこまで時間を取らせるわけには……と、抗議したのだったが、頑なに首を縦に振ろうとはしなかったのだ。

諦めた俺は手を上げて応え、控え室に向かう。

控え室は思いの外広かったが、今は第一試合ということもあって中には誰もいなかった。

途中ベンチに座りたい欲求にかられかけたが、ここで座るともう立てなくなるような考えに捕らわれてしまい、結局座ることはなかった。

開始三分前の放送が鳴る。

俺は重い身体を引きずって球技場内に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4280x/>

犯罪者は英雄？

2011年10月19日01時26分発行